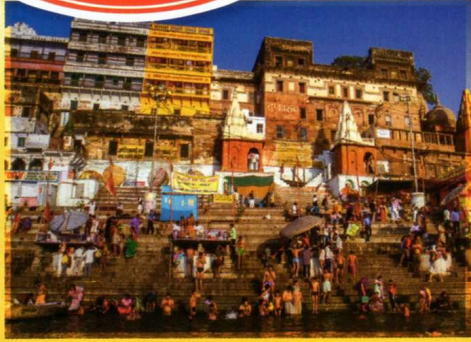


1名様一室
同旅行代金

羽田発着 / エア インディア 往復

聖なるガンジス川と タージマハルを訪れる



女神ガンガー
Goddess Ganga

クンビーラ(ワニ)に乗っているこのクンビーラは日本では「こんびら」として首訳され海上交通や水運の神として信仰されています。



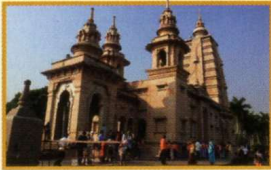
聖なる **ガンジス川**
The Ganges

ヒンドゥー教の女神ガンガーが地上に降りた姿とされ、ヒンドゥー教徒の信仰の対象であり、この川の水で沐浴すればすべての罪は浄められ、死後の遺灰をこの川に流せば繰り返される輪廻から解放されると信じられています。

神秘と歴史が息づくインドの観光地へご案内

仏教四大聖地のひとつ サルナート

仏教の開祖である釈迦(ブッダ)の生涯ゆかりの地。
[四大聖地(誕生の地ルンピニ(ネパール)、悟りの地ブッダガヤ、初説法の地サルナート、入滅の地クシナガル)]が代表的。



ムルガンディー
寺院

日本人が描いたブッダの一生の壁画が有名。



ベナレスからデリーは鉄道で!

ヴァンディバールト・エクスプレス

(乗車時間8時間)



インド国鉄が運営する高速鉄道。運営やサービス面で日本の新幹線を目指しています。



赤砂岩で築かれた城壁の色

アグラ城

インド・ムガル帝国全盛期の16~17世紀に築かれた、赤砂岩の城壁が特徴の壮大な世界遺産です。第3代皇帝が築き、以後300年にわたって歴代皇帝が住居としてきました。高さ約20mの堅固な二重の城壁が約2.5kmにわたって続くため、「レッドフォート」とも呼ばれます。



インド最古のミナレット

クトゥブミナール

インド最古で最大のミナレットとして知られますが、本来のイスラムにおけるミナレットとは違い、イスラムによるインド支配を示すその象徴として建設されており、もともと存在していたヒンドゥー教寺院を破壊し、建設にはその石材が利用されています。そのため偶像崇拝を認めないイスラム教において、いたるところに動物や女神のすがたをみることができます。

行きたい旅、見つかる。



ウェブなら
24時間お申込み受付中!

カード決済可能! 空席状況が分かる! 催行状況が分かる!

阪急交通社

検索

スマートフォンの
方はこちらから



0570(08)8989

※一部のIP電話からはご利用いただけません。

上記電話番号 受付時間 ●月~金 9:30~17:30 ●土曜・日曜・祝日 9:30~13:30(電話受付のみ)

お問い合わせ

■旅行企画・実施:(株)〒105-0022 東京都港区浜田町2-10-1 ニューピア竹芝サウスタワー (株)阪急交通社 東日本営業本 総合旅行業務取扱管理者 大! 総合旅行業務取扱管理者とは、各営業所での取引の責任者です。ご担当者からの説明にご不明な点なく上記の総合旅行業務取扱管理者に詳しい旅行条件を説明した書面を事前にご確認の上、お申込みくだ

復直行便利利用

(羽田⇄
デリー間)

新
コース

現地
係員
同行

航空
会社
指定

コース番号・媒体番号 XT768AI-14

阪急交通社

検索



スマホで簡単申込み

インド

5
日間

■旅行代金
(おひとり様
(2歳以上)
1・2名様一室
ご利用の場合)

16万円~21万円

※燃油サーチャージ(目安)18,440円:2026年2月17日現在。なお、今後変更される場合があります。 ※国際観光旅客税・国内空港施設使用料・旅客保安サービス料および海外空港諸税、航空保険特別料金が別途必要となります。

■出発日(2026年)と旅行代金(おひとり様(2歳以上)1・2名様一室ご利用の場合)

出 発 日	旅行代金	出 発 日	旅行代金
5月 7・14・28	160,000円	8月 20	夏休み 170,000円
5月 21	170,000円	8月 27	160,000円
6月 4・11・18・25	160,000円	9月 3・10	170,000円
7月 2・9	160,000円	9月 17	210,000円
7月 16	190,000円	9月 24	シルバー ウィーク 出発 170,000円
7月 23・30	夏休み 170,000円	10月 1・15・29	180,000円
8月 6	210,000円	10月 8	190,000円
8月 13	お盆 200,000円		

※幼児(2歳未満)の参加はご遠慮ください。

日 程	地 名	旅 程 (スケジュール)
1	日本	11:25:東京(羽田)発→空路、 エア インディア にてデリーへ。 18:10:デリー着後、ホテルへ。 【デリー泊】 <input type="checkbox"/> 機夕
2	インド	午前: デリー市内観光 (世界遺産○クトゥブミナール遺跡、☆雑貨店にてショッピング)。その後、空港へ。 13:30:デリー発→空路、国内線にてベナレスへ。 15:15:ベナレス着後、ホテルにチェックインします。 その後、ガンジス川の夕方のお祈り鑑賞へご案内します(注1)。 【ベナレス泊】 <input type="checkbox"/> 朝昼夕
3	インド	早朝:沐浴鑑賞へご案内します。 午前: サルナート観光 (○サルナート遺跡、○ムルガンディー寺院)。 昼食後、ベナレス駅へ。 ▲特急列車(2等)にてデリーへ(夕食は列車内にてご用意します!)。 デリー着後、アグラへ。 【アグラ泊】 <input type="checkbox"/> 朝昼軽
4	インド	午前: アグラ観光 (世界遺産○タージ・マハル、世界遺産○アグラ城)。 昼食後、バスにてデリーへ。 20:50:デリー発→空路、 エア インディア にて帰国の途へ。 【機中泊】 <input type="checkbox"/> 朝昼機
5	日本	07:55:東京(羽田)着。通関後、解散。 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>

インドへの渡航には査証(ビザ)が必要となります。査証実費1,640円に、当社で査証の申請を代行する場合手数料として5,500円(税込)を別途申し受けます。また、旅券(パスポート)の残存日数が査証申請時6カ月以上必要となりますので、ご自身のパスポートの有効期限をご確認ください。旅券の査証ページの余白が2ページ以上必要となります。日本国籍以外の方はお問い合わせください。

注意事項については下部をご覧ください。(注1) 雨期の際にポートが運行中止になる場合は岸からの鑑賞になります。

10名 食卓3回/昼3回/夕食(軽食を含む、機内食を除く) 同行しませんが、現地係員が同行いたします。 エア インディア(航空機の利用クラス/エコノミークラス) [デリー]アジョカントリーリゾート(一例)、[ベナレス]プライムランド(一例)、[アグラ]グランドメルキュールアグラ(旧クリスタル・サロヴァー・プレミア)(一例) (利用ホテルクラス(当社基準)/スーペリアクラス(アグラ・ベナレスはデラックスクラス)) ※宿泊ホテルは、同等クラスまたはそれ以上のクラスのホテルに変更となる場合がございます。 [62K15753]



世界遺産 タージ・マハル Taj Mahal

世界遺産ランキングでもいつも上位に入る、22年の歳月と一日2万人の労働力をかけて造営した総大理石の霊廟。緻密な左右対称の設計と、宝石が埋め込まれた壁面が美しく、インド・イスラム文化の傑作です。

当ツアーのポイント

- 1 都心からアクセス便利な**羽田発着**
- 2 デリー~ベナレス間は**ラクラク国内線移動**
- 3 熱気あふれるガンジス川を
朝・夕 たっぷりご案内いたします
朝 夕
見学 見学
- 4 **1日日本お水付き!** (2~4日目)

ベナレス・アグラでは

当社基準 **デラックスクラスホテル**にご宿泊!

3泊目 [アグラ] **グランドメルキュールアグラ**
(旧クリスタル・サロヴァー・プレミア)(一例)

2泊目 [ベナレス] **プライムランド**(一例)

ご予約先

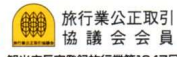
阪急交通社
〒1-16-1

メディア営業三部
幹根 希美

お客様の旅行を取扱う
の旅行の契約に関し、
ありましたら、ご連絡
先にご質問ください。
お返しいたしますので、
さい。

旅行条件のマーク

- 最少催行人員
- 食事前回数
- 添乗員
- 利用航空会社
- 利用ホテル



観光庁長官登録旅行業第1847号
一般社団法人日本旅行業協会正会員

全コース共通注意事項

○=入場観光、○=下車観光、○=施設見学、○=乗車又は乗船又は飛行にての観光、○=ショッピングです。●=掲載の情報は、発送日の2週間前までの状況をもとに作成しております。ご出発日によっては、お問合せの際、満席や専断状況により催行が中止(全出発日旅行確定のコースを除く)となる場合がございます。●=旅程内に記載されているスケジュールは、航空機・バス・鉄道・船の都合・天候・現地事情により、旅程・見学順序・宿泊場所・食事内容等が変更となる場合がございます。●=掲載の情報はすべてイメージとなります。●=○=オプションツアー・別途料金、詳細はお問合せください。●=日程表内の時間帯はホテルの出発時刻ではなく、交通機関の出発時刻を示しております。●=空港・ホテルでのポーターサービス(手荷物運搬料)は一部コースでは含まれておりません。●=コースによっては、当社他支店との共同催行となる場合がございます。●=航空機について ●=飛行機の座席については当社にご一任ください。●=ワースト・ベスト・プレミアム・エコノミー・クラスのアップグレードが設定されているコースについては、アップグレードがご予約いただいた日からキャンセル受付となり、満席によりお受けできない場合がございます。なお、お返金は1週間程度お待ちいただく場合がございます。当社からの正式な回答を持ってご予約の成立となります。飛行機の座席は当社にご一任ください。●=荷物宅配サービス・リムジンバスなどの機内以外でのサービスはございませんので、予めご了承ください。プレミアム・エコノミー・ワースト・ベスト以外のサービスはエコノミー・クラスと同様となります。●=使用機材によりシート配置、機内食などサービスが異なりますので予めご了承ください。使用機材が予告なく変更される場合もございます。

お客様の個人情報はお客様との連絡のために利用させていただくほか、お客様がお申し込みいただいた旅行において運送・宿泊機関等の提供するサービスの手配及び受領のための手続きに必要な範囲内で利用させていただきます。運送・宿泊機関などへの個人情報の提供について同意の上お申し込みいただきます。

マークの見方 ※各コースページ上部についています

- 新コース
- 初登場のコースです。
- 添乗員同行
- 本乗員が任務
- 出発空港から現地
- 到着空港まで同行しお世話をいたします。
- 全食卓付
- 全ての食事が付いていますので、お食事の心配がありません。(機内食を除く)
- 現地係員同行
- 現地到着後、現地係員が同行しお世話をいたします。
- 航空会社指定
- 利用航空会社
- 指定なので、ご出発の計画にとっても便利です。
- トラベルイヤホン
- 着の音に気づかず、添乗員・ガイドの声をじっくり聞くことができます。
- 各種限定
- 快楽を味わっていただけるようご参加人数を限定させていただきます。

◇プロローグ

「5月11日発の玉龍雪山は、お二人だけになり、中止となりました」

えっ!?

3日前の3月7日には「中国東方航空の、昆明への直行便がむこうの都合で無くなりました。そこで、上海で乗り継ぎに変更となります」の連絡があったばかり。それは乗り継ぐ分、1時間半早く出発。2時間遅れて到着程度のこと、行けるのならいい…と返答。やれやれ、ヤバかったけど、よかった…。

それが、他の皆さんが、次々と「ならばキャンセルにする」となり、結果ツアー自体が、中止になったのだという。その申込金は提言のままに、6月のピレネーの内金処理に回したが…。

それは、3か月前でもキャンセル待ちになるのに懲りて、昨秋、半年前ながら催行決定の中から選んでいたツアーだった。雲南省の横断山脈はヒマラヤの東端で、山をくっきり見たければ秋、花を見たければ春…のどちらかになる。登れない白い山はもう遠景にあればいい。厳しい環境で健気に咲いている花の方に、ときめきたい。…だったのに…なんちゅうこっちゃ!!



《朝のガンガー（ガンジス河）》

遡れば高市首相の、11月7日の台湾有事に関する発言以来、中国の嫌がらせが続いているのだ。

コロナ後に、どうやら中国便が復活してきて、昨年あたりからは、「添乗員付かず。現地ガイドが案内」の格安タイプも増えてきていた。九寨溝でのパンダ漬けには辟易としたけれど、柳の下のドジョウとばかりに、似たツアーが目白押しになってきていた。人数多す

ぎも辛いけれど、こんなあたりをつまみ食いでもまあいいかも…と思い始めていた。

でも、中国にとっての日本苛めが一番簡単ということか、レアアース貿易等にさらに拡大していき、中国便はその度消滅していった。中国客が激減するだけでなく、日本側の催行決定済みツアーにも容赦なく影響してきたのだった。



《朝日を拝んで沐浴》

さて、介護パートは、月・水・金の週3日の仕事だ。コロナ自粛の間はそれでもよかったけれど、いざ海外旅行が復活してくると、結構悩ましかった。しかし、月に2回の有休をとり、あと2回は振替出勤にしてもらえば、何とか出かけられる。半月前のシフト希望にそう申請すればよい。

ただ、ブラック職場では、正職員は有休をとれていない。誰かの発熱や、親の葬儀やで（最近、新人の突然の退職でも）、簡単にシフト変更されウヤムヤにされている（有休は2年で失効してしまう権利だが…）。それでも、本当に休まねばならない時が自分にもおきうるから、お互い様の解釈で、承諾・出勤となるらしい。そんな労働契約を外れているゴリ押しと健気な放棄でどうにか現場は回っている。

私は、わざわざ披露したことはないが、一週間ほど休むということは、憶測できることではある。巡り巡って、押し付けてよし、気づかぬふりでよし…のしわ寄せがされてはいただろう。

ともあれカレンダーを睨んで、催行決定している中で勤務支障は少ない中から…と、入念に選んだ。啓子ちゃんも、私の都合に合わせて申し込んでくれていた。

それなのに、二人して、5月がフリーになってしまったのだ。おまけに3月末で雇止めを通告されていたから、これじゃあ、泣き面に蜂というか…どうしてくれるのよ！

そこへ、一連の中国便キャンセルの埋め合わせのような、ぎりぎり5月発を含むチラシが届いた。

インド5日間 16万円と、裏には、ウズベキスタン4日間 18万円。ウズベキスタンは、中国国際航空での北京乗り継ぎとなっていて、中国不審募今は、ひっかかる。

すぐ啓子ちゃんに電話して、空いたばかりの5月に、インドをいれることにした。

そういう成り行きで、玉龍雪山中止連絡の翌日に、このインド行きは決まったのだ。

<おまけのグチグチと玉龍雪山復活！>

自分は、何度かこういう目？には遭っている。どう華々しいチラシが出たとしても、成立する、しないがある。

山専用だったアルパインツアーサービスの時も、カムチャツカが成立せず、カナディアンロッキーに回されたり（費用が倍になるため、翌日まで考えて承諾した）、そんな実績があったから、次の年には、わざわざ「カムチャツカが成立しますよ」とむこうからお誘いが来たり…。今はロシアに飛べるはずもない。2022年2月24日にウクライナ侵攻が始まってから、紛争は世界中に拡大していくばかり…。どこも、その時々のご縁で行けたのだと感謝だ。

ちなみに、去年の某社の僻地ツアーでは、現地でポーターが集まってこず、没になる…がおきていた。いくら全額返金されたって、破れた夢は戻らない。

情報だけは過多になり、僻地の貧民層の欲も膨れ上がっている。ヒトは簡単にずるくなり、儲かる方へ流れる。相手の迷惑や、約束などは、元々買い叩かれていますと思っているから気にならない。そしてまた、彼らの方も、予約に応じたのに、保証なしに没になるという目には散々遭っているのだ。

先進国が経済格差のままに主導できた時代は終わった。どの国も人も、もう我慢はしない。指示通りに遂行していく…は、今後もっと難しくなっていくことだろう。

その前に、老いていく身が、いつダウンという事態になるかわからない…。こっちが切実！



《ガンガーに流す灯明》

さて、1月末に、「3月末まで」の雇止めを聞き、心が随分と揺れた。そのあたりは「バリ島紀行」にグチグチを連ねて、3月14日には写真を嵌めて完成させ、一応はすっきりさせた。

かたやには体を動かしての大片付け、大掃除もやった。卯辰山トレーニングも開始した。

3月19日、誕生日の1か月前ということで、「後期高齢者医療資格確認書」が届く。けっこう、しみじみと、ついに後期高齢者なんだ…になった。悪あがきも、年貢の納め時…ってことか…。

そうしながらも…相変わらず阪急からは、カタログの束が届く。

あれ？あの玉龍雪山がまだ載っているではないか？同行添乗員が決まり、費用が2万円安くなっている。どういうこと？と電話をすると、6月8日発上海経由は成立したのだという。それって、6月21日～30日のピレネーハイキングに近くなりすぎ…。でも、成立しているのが、あるんだ…。

ちなみに、2010年の、日本百名山仕上げの最後の二か月は過密スケジュールだった。高校非常勤講師の

私は夏休みしか動けないし、残りの15座は行きにくい所ばかりが残っていた。地元発、東京発、マイカー利用と、毎週山行きスケジュールを組み、8月30日の空木岳で完登とした。

でも、この時の焦りは、大正解だった。翌年、3月11日には、東日本大震災がおき、百名山どころではなくなったのだから…。そして毎週ペースは、リズムができて、かえって体調がいくらいだった。

何といっても、もう仕事に縛られてはいない。これは大きい要素だ。6月に向けて体調ベストに仕上げていく…に専念すれば？半端に仕事探しや、趣味探しにふらふらし、あげく縛られて休めない！になるより、夢に焦点を合わせるべきでは？



《アールティーの礼拝僧》

3月27日、NHKの朝ドラ「ばけばけ」が終了した。当然のことだが、芸達者な方々が演じて、人気爆発しても、必ず終わりを迎える。誰にも終わりや区切りがある。いちいち感傷に浸り、立ち止まってはられない。終わったら次…次へいかねば。

月末の本来の最終日は残りの有休を消化としたから、今日の午後で5年間の職場ともおさらばだ。

「介護パート職が終わった」の象徴として、この際、玉龍雪山に申し込んでしまおう！

電話を入れると、阪急の方が、「ありがとうございます。あれ？ピレネーも申し込まれていらっしゃるんですが…」と返してきた。そうよ！ボケたんじゃないわよ！こう詰まった元々はね、そっちのせいなのよ！でも、では来年にでも、とは言えない…と、自覚したから、今年の方がまだ若いと思ったから、無謀気味と思ったけど、そう決断したんだわよ！！

なお、そんな接近戦には、お茶の稽古をかかえる啓子ちゃんを誘えない。おひとり様部屋追加10万円は覚悟した。でも、申込金の振込書には、『予め早期割引が設定されていたコースで出発日の変更等により、割引が移行されていない場合は、コールセンターにお問い合わせください』とあり、早期の2万円引きが適応されることの念押しをした。—2と—2なら、追加は6万円に抑えたってことだ。

こんなツアーの連続は、雇用中ならやれるはずがない。

執念深いが、お陰で夢を叶えられるもん！と、グチグチを「封印」「昇華」したのだ。

＜動こう！世の中いろいろ＞

北日本観光の3月28日の王子が岳、29日の和気アルプスに参加。それぞれ234m 1時間45分の山、370mの神ノ上山から縦走9km 5時間。春の始動には、標高では手ごろな山。久々の7つピークのアップダウンはきつかったけれど、山勘を取り戻した。

その晩の倉敷で夕食を共にしたZさん（3年前、鹿島槍で同行）は、トッコさんから、私が外遊三昧中と聞いていたらしい。彼女の夫はいよいよ経管栄養になった。娘夫婦と同居だから、まだこの程度には参加できるが、いくら何でも妻の立場では国内までが関の山だという。私も、夫が単身赴任中の方の方が出易い（次には別の理由を考えるだろうが）と思い、「今のうちに」でいるのだ。



《ブルメリア》

4月…稼ぎ仕事なしのヒマになり、「ツアーが済んだら、次の仕事を探そうか…」に、早くも心が揺れ出す。子育てにしろ、絶えずノルマがあった日々。なるほど…「ヒマ慣れ」していない…。

4月5日には 5月14日発インドが成立し、インドビザ申請用の写真（半年内）と書類のための速達が届く。サイズや背景が白など、指定が細かかったので、スタジオ撮影とした。

プロが撮っても、2019年取得のパスポート写真より明らかに加齢。私の目は「ああ老けた」…と判定する。でも、ゲートの機械は「同一人物」と判定できる…んだよね。

6日、学習塾時代のアシスタントに、お花見ランチの電話を掛ける。その前の秋にも一度、電話をかけていたが、「娘の家へ大片付けの手伝いに来ている最中」とのこと。私は職場のグチこぼしが要件で、その時会話が弾まなかったのを、私が一方的こぼしすぎたせいかもと、後で「ゴメンね」の葉書で詫びたくらいだった。

それが、今なら話せる…と言い、実はあの日は、3日前に婿が自殺しての、娘を引き取るための片付けだったのだと言う。子供がいなかったため、婿の姉との遺産折半も揉めて、今やっと落ち着いたところ。電話はいいけれど、まだランチの気分にはなれない…とのことだった。

猛反省をした。いろんな災難がある…彼女も娘さんも、どうか災難を乗り越えてほしい。



《ガンガーで沐浴》

9日、親知らずの詰め物がとれてしまい、久々の歯科医院に行った。次回の都合を聞かれて、気にするスケジュールなんてないんだ…を痛感する。50年間、予定に追われる日々を過ごしてきたのだった。50年も…と、また神妙な心地になった。

よりによって、その午後、例の博士号女史にでくわす。彼女も、非常勤講師から介護への転職は、同じ思いや決断を経てだった。世の変遷と、加齢と、「働く」へのこだわり…十分同調できた。求職は、78歳の履歴書にあちこちで呆れられ、社会福祉センターへ行き、マッチングしてもらったそうだ。2時間が清掃+2時間が配膳のサポートなのだという。シルバー人材銀行へ行っても、老女はその程度だ。このままヒマを持て余したら、そのルートでも打診するか…焦ることではないが。



《美女とタージ・マハル》

4月11日～14日の、北観の三宅島も参加。啓子ちゃんも、竹芝棧橋からの参加とし、ハイキングで足慣らしをした。彼女には、金沢弁の団体が、懐かしい居心地の良さだったらしい。島の変遷を見てきた、誰とも顔見知りの女性ガイド達が、いかにも島育ちらしさを体現していて、よかった。

ただ、「能登の今」を見てきた目には、東京都の潤沢な支援があちこちで目についた。お金が回れば、危険な島にも戻れて、リゾートで食べていける。しかるに高齢化の能登は、地続きでも過疎化するしかない。今はまだ、少々パフォーマンスをやれば、メディアは飛びついてくれる。だから芸能人の訪問も途切れない。それがずっと続くか？だ。

便利な旧市街に住んでいても、人は高齢化し孤立し、デジタル疎外をされて、終活産業や詐欺に狙われている…。余生といえども、乗せられず、冷静でないと。

19日 満75歳。カード会社や、いわゆるメールアドレスを通知してある企業からの祝いメールが届く。通販系からは、誕生日特典付きのカタログが届く。便利さと経費節減を享受しているのは、あっちだけ！こっちは削除仕事と廃棄物が増えるだけ！

やはり求職休養中の70歳の弟からのおめでとうメールには、兄の近況報告がついていた。

79歳の兄は、認知症そのものになって、会話不能になった。長女がマンションへ片付けにも入ったらしい。子供達主体での体制になって、それでいいことだ。



《通勤の路線バスを待つ人々》

今やるべきことは？5、6月が過密スケジュールということは…月刊機関誌チョウゲンボウの、表紙と「山と花コラム」がおざなりになってしまうかもしれない。半年ごとの、生化講座の交流誌も…。先手が可能につき、片付けておこう。

まず5月1日用大山を完成させ、送信。続いて6月1日用に上高地、7月1日用に利尻山にとりかかる。思い出すこと、調べること、写真を選別すること…に時間を忘れる。

『花の百名山』を読むと、田中澄江が、70を超えてからせめて長官山まではと挑戦している。花につられて7時間がかりでついに1719mの利尻山に登頂できていた。仕事と障害児を抱え、山を本格再開できたのは還暦から。大腿骨骨折や再手術も乗り越えている。彼女には支援メンバーがいるが、足を動かしたのは熱

意。マイペースで登る環境に設定できれば、まだ山趣味を続けていけるかもしれない…。

22日 朝刊のおくやみ欄にW氏の名を発見。52歳…私がワングルのOB会再興活動を始めた時の現役1回生だった人だ。卒後、県立高校の山岳部顧問になり、ちょうど白山訓練中に遭難者救助に関わったことから、新聞でそれを知った私が会報への寄稿を依頼した…というご縁があった。さらに、N高校では、国語教師の奥さんの方と同僚になった。

若過ぎる…何がおきたのだろう？白山紬に墨絵の高山植物を描いた着物を着ての通夜参列を決める。

そんな鬱っぽくなった午後、たまたまBSシネマで「PLAN 75」があった。国が75歳以上の安楽死を認め、推奨する時代を想定した問題提言映画だ。

一段とシワシワメイクの78歳の倍賞千恵子が、ホテル清掃員を敵になる、凜とした高齢者役。磯村勇斗は簡保CMのキャラクターのままに、役所窓口で「PLAN 75というのがありますよ」と勧誘する役。河合優実は、専用コールセンターで質問や迷いに、穏やかに応答する役で、それぞれのやり切れなさを演じる。毅然と生きてきたヒロインだが、再就職できず、部屋も借りられず、生活保護には躊躇し、PLANを受け入れる。しかし土壇場で、施術所を脱出してしまう…で、おしまい。

これは2022年の映画だが、彼女は2025年には、「TOKYO タクシー」で、莫大な遺産を木村拓哉ドライバーに託し、高齢者施設に入所する85歳を演じている。

この手の提言映画は、解の見本などは出さずに、話題と賞だけは獲得する。



《ミーナールを飾るコーランの章句》

「働かざるをえない、哀れな老人」と、見えるべく、しわしわよれよれを撮り、物語も、ヒロインの同僚が倒れ、それを契機に全員解雇され、見舞いに行ったら孤独死し腐臭が…から展開していく。

私も、GHで働き始めた頃、某職員に言われた。「は～ん、年金が少なくて、働きに来てるんやね！」と。その時はこの人は、バカだと軽蔑したが…世間の一般常識はそちららしい。始まったばかりの「風、薫る」にも、看護は「下女の仕事」のセリフが出てくる。ケアは、身分が低い、貧しい者に押し付けて、対価が払われてきた長い歴史がある。

社会通念では、働いて蓄えて、晩年は悠々自適に過ごすのが一般的な高齢者である。そうでないのは、「働かざるを得なくなった人生の落伍者」であり、憐みの目で、まず見られがちなのだ。だからますます、みくびったり、押し付けたり態度も出てくるのだ…。

「働く」を肯定している筈のこの私が、監督の意図どおりに、映画のホテル清掃員の老女たちが、客観的には哀れっぽくしか見えないものだ…に、愕然となった。そう、自身の猫背がウィンドウに映っていてギャツミみたいに…。他人には、まして、限りなく分断の進んだ時代には、なおのこと、まずはそうとしか見えない！に気づいた。

その夕方、駅西の葬儀会場に出かけた。52歳の働き盛りゆえ、教職員で会場は溢れ、第二会場を設定するほど。喪主の挨拶で、故人は泉丘高校、教育委員会、教育センターのエリートコースをたどり、桜丘の教頭という現場に戻ったばかりと知った。18日夜プライベートの会合に出かけ、帰りのタクシー内での急変だったそう。検死もあって、葬儀が遅れたという。

迷える後期高齢者は、またも若死にを耳にして、深く反省した。

もっと感謝の気持ちをもって、生きている時間を大切にしなければ…。ペースダウンして、人生の「遊行期」を味わってもいいんじゃないか…。

ここで「遊行期」を検索し直す。Windows11になってのAIの回答は、『人生の最終段階で、社会的役割や所有への執着を手放し、身軽に、「遊び歩くように」内

面的な自由と心の充足を追求して生きることです。古代インドの四住期思想をもとに、現代日本では75歳前後以降の「余生の過ごし方」の指針として語られます。』とあった。そして『遊行期』の著者五木寛之が「まず、ガンジス河を目指すことです」と言った…も、ピックアップしてある。

あまりに「今」にびったりで、笑い転げてしまった…。成り行きで、そうなっていったんだけど…模範解答を実践してるんだね！！



《朝のガンガー（ガンジス河）》

5月2日 悟が子守り役の日で羽花を連れてくる。快晴の予報だったから、卯辰山の運動場に連れて行った。キャッキョと駆け回る。しっかりした走り方になった。ジジのジッパーの下のボタンが掛かっていないのを見つけて「開いてるよ」と指摘したり、お気に入りの帽子を自分が被ったら、「帽子ないの？」と聞いてきたり。無垢無力で生まれて2歳9か月にして、これだけの観察をし、状況判断をし、会話にできる。こうやって、新鮮な命が生まれ、交替していかないと…。

比べたら、GHの高齢者たちは、できなくなったことだらけだ。生活者としての判断もできず、死ねないでいる。

また、赤子の場合は世話役には最高の笑顔で返し、オキシトシンを大放しさせる。それに対し、認知症者は、介護者を泥棒呼ばわりしたり、「くそばば」と罵ったり。爪を立てたり。蹴ったり、殴りかかってきたり…。さらには失禁や徘徊やで、自ら、放棄や忌避や嫌悪を招くようにしている…。

実の子でも持て余し、嫁は疲弊し、介護保険ができていたのだが…。

他の動物は献身的な子育てをし、ちゃんと子離れをして、次の繁殖にかかる。それができなくなったら、死を受け入れるのに…ヒトは、かえって迷走しているのではないか？そのあげく、個人の自由として、結婚しない、子供もいらない…をやったら、それは「生き物」の定義の3原則「細胞を持つ」「代謝を行う」「子孫を作る」を満たさなくなったということ。

つまり肥大した前頭前野は暴走して、他の生きもの達を凌駕したうえ、自らの繁殖は否定するようになってきたのだ。身勝手な解釈での戦争といい、地球を何回も破壊できる量の核の保有といい…。これ以上をAIに求めて、今後、どんな未来に繋がるというのだろうか…。



《ベナレスの町》

次のブランコと滑り台も、羽花は大はしゃぎ。ジジババが先に疲れ果てたが、いざ移動の車に乗った途端、目がとろんとなり、グーと寝落ち。

羽花を見ていると、生まれて、次を育てたら、すみやかに去る…がとても自然なサイクルと思える。事実、免疫力の数値は、そうなっている。

私の今はもう、ヒマな時間を持て余している…。

やっとインドの勉強を始める。不遜な経緯だったから、5月が暑季で40度越えがざらで、観光シーズンオフと今になって知る。熱中症対策が必要だ…。

さて、成田発であれ、羽田発であれ、その前に金沢から移動しなくてはならない。eネットでの予約は1か

月+1週間前から可能。これはもちろん、悟に頼んでいる。留守にするからには、どんな旅に出るかを知らせておかねばならないし、一括して、アルバイト料を払っているのだ。3月の時刻表改正から運賃は上がり、インバウンドが増えているせいと思うが、最低価格の切符が取れないようになった。

ともあれ、私のPC傍のカレンダーは、ツアーの申し込みなどが大混線。早めの新幹線の予約手配もあれば、ごみ出し、町会、篠笛の稽古日、呉服屋の茶会、加賀友禅検定合格者パーティーも…。同窓会幹事は2度ともツアーに重なり断ったし、学研指導者会親睦会も重なり、詫び状を書いた。

あれ？27会のランチ会の印が抜けている。2日か9日かどっちだっけ？お世話役さんに「実は6月が過密になってしまい、重なれば欠席扱いで…」のお尋ねメールを出す。すると、「それは7月2日です。その日で大丈夫ですか？」のメールをいただいた。すぐメモしなかったせいで、お詫びメールを返す。

さあ、今度こそ忘れないうちにちゃんとメモを…と、次の7月をめぐったら、なんと書いてあった！

自分は、忘れてはいけないと書いておきながら、それを忘れて、慎重なつもりをやっていた。実害を出さずに済んだとはいえ…。落胆は大きかった。

こんな勘違いを、自身が気づかないまま、これからどれだけやるかしれない…。

多少とも責任があるようなことに、もう、手を出してはいけない！仕事…という選択肢は外そう！



《アールティーの会場》

また、「遊行期」の単語が浮かんだ。

75歳で迷うことも、ガンジス河を見ることも、ジャストマッチング…。まさに、その「時」だったのだ。インド行きで、よかった。

◇5月13日（水）金沢～

昨日は、また、アライバルビザの申請もやった（悟にやってもらった）。先のバリ島でこれもあると知っていたし、一方で、申請のための確定したホテルとホテル住所などは、旅のしおりが届かなければわからない。

これは、最新版の「地球の歩き方」にも載っていない…というか、申し込んでから半年の間にも、出入国システムが変わってしまう。受理の返信を受け取って初めて、なあんだ、これまでの入国カードと結局同じじゃないか！の感想になる。

どちらにせよ、時代の波を味わう度、「あてになる子供」を持たねば！を痛感する。

でもさあ、これまで普通に生活してこれていたのだ。どんどんシステムが変わってしまい、いつのまにか落伍者側にされ、サポートを頼めば高額の利用料がかかる（わが子のバイトにせよ）…ブツブツ。



《遺跡で暮らすインコ》

さて、今朝のNHKの「朝いち」でちょうど「老害」を扱っていた。（メモしつつ、聞いていた。）

ざわざわ、びくびくし、老害と呼ばれたくないと悩むあなたへ…が、サブタイトル。「昔は上に気を使い、今は下に気を遣う損な世代」と思いつつ、40～50代が過敏になっているようだ。

① 怒りっぽくなった ② 自分語りをするような

った ③ ITが苦手と感じ、おいてけぼり感を持つ ④自称「私、〇代だから…」と先に断っておく…ようになった時、自身が老害かも？と悩むらしい。（翌日、啓子ちゃんと会った時、「あの年代で、老害と思うのか？」が話題になった。）

この言葉が出てきたのは1970年代、「公害」が問題視された時に、企業内にも、同じ語感での「老害があるよね」で生まれた言葉だという。「企業内」で老人が後進に譲ろうとせず迷惑をまき散らす…を指すものだったと、辞典編集者は答えていた。

その意味が緩くなり、年上全体の揶揄などに使うようになってきたらしい。

「健康社会学者」という方が、対処法をコメントしていた。①②は昭和の名残…6秒待つか、書いてスッキリで対処する（私の紀行がそれ！）。③は、ITが得意な人が得意なことをやれば…と任せてもいいが、やる気を見せること。「何からやればいい？」「何を見ればわかる？」と聞いて、自分が実力をつけていく。④は相手に過剰に気を遣わせる呪いの言葉だから、「言わない方がいい」であった。

自分達の40～50代なんて…年功序列がまだビシッとあって、姑や高齢者が威圧的な「老害」を堅持していて、そちらへの我慢ばかりだった。我慢の嫁時代であって、自分の側の話だなんて捉えるはずもなかったわ。変革のスピードが速すぎて、ストレスが溜まり、早くに意識してしまうらしいと判断。

そのあと着物を着て、呉服屋の呈茶付きの展示会に参加してきた。この時の業者は、皇室献上品を多く扱ってきている。大王松、北山杉、高野槇等の地紋と、品のいいぼかし染めが得意。その分、着物市場にも多くの出品があったが…。業界は大衰退をしているけれど、この際便乗とばかり希少価値を言い立て、値上げが甚だしくなったようだ。

ともあれ、一服を頂いて、説明をまあまあ聞いて30分やり過ごし、帰宅し脱いで風を通しアイロンをかけて箆笥に収める…。はて、時間を大事に使ったのか？ 時間潰しをやったのか？

前者の方と解釈して、ばたばたと、旅行服に着替えた。酷暑の国のわざわざ暑季へ…だから、薄着だし、最小トランクに収めている。



《アショカの木》

久々に、深夜高速バスで出発だ。

明日の 11 時離陸のための集合は 9 時、いくら羽田発でも始発新幹線では間に合わない。でも羽田近辺の前泊は高い。ツアー代金が 16 万円（燃油サーチャージ、旅行保険等込みで 222,500 円）に対して納得がいかない！…そうだ、深夜高速バスの手があった！すると 6,600 円！新幹線+前泊の計 27,000 円がそれだけで済む！16 年前は、そうやって新宿発の百名山ツアー参加のために通った。4 列席だったが往復で 6,400 円だった…あの頃の自分が懐かしく蘇る。

三々五々、21 時 50 分発のバス停に集まってきたのは、新幹線とは違うラフな顔ぶれ。運転手の真後ろの席で、寝にかかる。



《アールティーの前座》

◇5 月 14 日（木） 羽田～デリー

3 列席でも寝にくいなと思いはしたが、時計は進んでいて、厚いカーテンの外はもう明るかった。着いたとばかり下りたら、いくら 16 年ぶりでも、違う景色。あ？まず上野駅停まりだったと思い出し、慌てて手を振り「間違えました」と再度乗車し、東京駅日本橋口で下車。間違える度…伶俐になる～♪

その分、「羽田第 3 ターミナルとは、羽田の最初のターミナル！」と念を押す。モノレール乗換の浜松町は、1 か月前に、三宅島へ行くために下りていた。記憶の貯金がまたちょっとずつ増えてきているなあと、ほくそえむ。



《ジャスミンの花》

羽田に国際線があるのはありがたいが、インバウンドのみなさん、羽田と成田を間違えないのか？今回のように複数が詰まったり、代替えしたりがあると、自分でも、どこで勘違いするやら？と不安にはなる。隣に座った人が、3 つの荷物をせわしなく開け閉めし探し物を始める。自分も、物の定位置を決める！を徹底しないと…と自省。ほんと、搭乗できるまで、不安だらけ。でも乗り越えて、その経験で敷居を下げていくしかない。

インドルピーに両替しておく。1 Rs は約 2 円。5,000 円を渡し 500 ルピー札 5 枚を受け取る。ガイドが初日のバスで両替してくれるものだが、旅のしおりにそうと書いてあったことがない。ホテル備品の情報もそうで、備えあれば憂いなし…荷物は減らない。根本的に、自前でやる…の精神でいなければ、海外には出られない。

無事、Zカウンター前で啓子ちゃんに合流できた。バリ島では、スマホのアライバルビザの画面がすうっと消えていく目に遭っているが、その操作も進歩し、保存できたらしい。

書類の受け取りチェックと、Mカウンターへの指示と、デリーでは一番左端の6番出口へ…を聞いた。今回は、また「添乗員なし、現地ガイド」のタイプだ。人員不足に、経費削減が流れだろう。

しょせん、定番の手続きしかやっていないと振り返られるが、当座は、初見のままで動くのだから、かなりのストレスだし、助け合わねば（かつ、助けてもらわねば）ならない。その意味では窓口氏は、名前を確認し、渡すものは渡す事務のみであった。

Mカウンターへ行ったら「こちらはコペンハーゲン行きです」と言われ、エアインディアはもっと奥で、そのエコノミーだった。それだって「Mカウンターの奥の方です」の言い方なら、困惑が一つ減る。人が減り、思いやりが減り…やはり、一年でも先に出かけておいた方がいいご時世とは思う。



《エアインディア機》

出国審査を済ませ「105ゲートって?」「また一番端だったりして…」と言っていたら、カートがずっと「どうぞ」と寄ってきてくれた。嬉しいやら、外見がりっぱに老人に見えたか?やらだったが、乗車。やっぱり一番端で、楽ができたのだった。

昨日の「朝いち」の話をしていたら、トラピックスのバッジを見た人=ひろ子さんが、「やっぱり両替してきます」と、トランクを預けていった。戻ってきた彼女に「金沢からです」と自己紹介すると、北海道からの参加という。千歳からの乗り継ぎで、なおのこと、

わけのわからない思いで、ここまで来たという。添乗員なしゆえ、助け合っとしても、まだメンバーすら分からない。「頑張りましょう!」と、乗り込む。

カウンターでの「窓の側で」は通じたようで…といっても「翼を外して」にはなっていなかった。多分、オンラインでチケット予約をやるような人は座席も確保できるのだろうけれど、カウンターで初めてeチケットを受け取る程度では、二人並んだ席がとれたら上出来のあたり。

そしてまた、お互いあれこれがあったが、一緒にインドに行ける…は、幸せな話であった。とびっきりの体験をしてこられる。啓子ちゃんの叔母は、インドの仏教遺跡巡りに参加したことがあったそうだ。私の両親もインドには行っている。たぶん今回も、土産物店で「同じのを持っているわ!」になることだろう。

12時20分離陸。レインボーブリッジや、羽田空港の滑走路が見えた。



《インド人のCA》

CAは、赤のパンジャビスーツが制服だ。インド人は哲学的というか知的な顔立ちをしている。日本の「かわいい」とは違う、大人のイメージだ。

実は2005年のシッキムが、初めてのインドだ。でもそれは、カンチェンジュンガを見に行くトレッキングのためだった。すぐ、東のシッキムへ飛び、紅茶の本場ダージリンを通過し、5000m近い峠を目指した15日間。観光は、最終日の、デリーのみで、クトゥブ・ミーナール、インド門、ラージ・ガート（ガンジーの墓）、フマユーン廟を回った。山が主体だったから、紀

行にも、それらは名前の羅列のみとしている。軽く扱った分、記憶も薄れている。

機内食には当然にカレーが出て、あのカレー漬けの日々を思い出していた。インドはアルコール系がダメかと思っていたのに、他の国以上に多種のアルコール瓶が乗っていて、びっくり。ちなみに、のんべえ洋子さん（後述）は、ウィスキーソーダを頼んだそうだ。



《インディカ米とカレーの始まり》

さて、インドの面積は日本の約9倍。人口は14億人で世界一。ヒンドゥー教が80%、イスラーム教が14%、仏教は0.7%に過ぎない。

仏教は世界三大宗教の内とされているが、本場インドでは衰退した。私は手塚治虫の「ブッダ」と、親鸞を少々しか知らないが、おそらく、王族の恵まれた育ちから生まれた哲学的な教えに傾きすぎ、夕餉にも困り、明日の命も知れぬ大衆には、観念的過ぎたのだろう。日本でも、まず天皇や豪族が仏教を取り入れているように、知的階級向きだったのだ。庶民には、土着のカーストを基盤にしたヒンドゥー教の方が生活基準そのものであり、祈りで罪が消え、輪廻転生で平等に天界に帰る…が、安心でき、信じるどころだったようだ。そして、今回のツアーには、ブッダが悟りを開いた最初の説法地サールナートが入っている。

「地球の歩き方」には以下のように載っている。「ヒンドゥー」は「India」の語源であり、ヒンドゥー教とはその名のとおり、「インド教」である。それは、インドの社会生活のあらゆる面と複雑に絡み合っており、単に宗教としてだけ説明するのは、大変に難しい。無宗教と言うことがあり得ないインドでは、外にルーツを持つ宗教の信者以外は、すべてヒンドゥー教徒だと

もいえる。そもそも、紀元前1500年頃に成立したバラモン教がインド先住民のもつ宗教観念や土着の神々を次々取り入れながら変化し、ヒンドゥー教へと発展していった。ヒンドゥー教徒は、特定の開祖・聖典を持たず、教団として組織されてもいないが、基本はこの至高の存在への信仰であり、また日常生活でも、カースト制を守り、特有の儀礼・風習を続けることを法（ダルマ）にしている点で、共通性をもっている。

なお、イスラーム教は、8世紀にイスラーム王朝ができた時代があり、特に今度の北インドでは、ヒンドゥーと融和した、インド＝イスラーム文化が花開いている。

また、シク教は、イスラーム教の影響を受けてヒンドゥー教を改革した宗教。偶像崇拜、カースト制度を否定し、人間平等を唱える。ビジネス、交通運輸、軍関係の仕事に活躍し、裕福層も多い、頭髪や髭を切らない掟があるため、ターバンとたつぷりたくわえた髭が特徴的。

ジャイナ教は、仏教とほぼ同時期に成立した宗教で、カースト制を否定し、厳しい戒律と苦行で解脱にいたろうとする。不殺生、無所有を強調。

以上のように「宗教の国」インドでは、宗教が人々の外側に形としてあるのではなく、その生活に深く根差し、人々の内側でその生死を支えている。

嵌まる国インドとは、「宗教とは、自分とこの世界にとって何なのか？」という根源的な問題に直面できる…であるらしい。…まあ、行く運命にはなったのだ。素直に、見てこよう。

さて、機内のディスプレイの方は…インドは映画王国なのである。ハリウッドにならって、ポリウッドなどのスタジオ拠点が6か所ある。聞いたこともなく、日本語字幕もない映画が並んでいる。またしても、アニメ系でごまかす。

不思議なことに、食後、窓が藍色になり、夜のようになった。太陽を真上にしたまま9時間あぶられ続けで飛ぶため、断熱しているのかもしれない。当方も夜行バスで睡眠不足につき、寝る。時差は3時間30分。

ヒンドゥー教の神々

インドを旅すると、あちこちで神様の絵を見かける。ときにきらびやかだったり、ときにはおどろおどろしかったり、その姿や持ち物にはそれぞれどんな意味があるのだろう。代表的なヒンドゥーの神様の見分け方や神様同士の関係性を頭に入れておけば、旅の楽しさも増すこと請け合いだ。

■ ヴィシュヌ

シヴァと並ぶヒンドゥー教2大神のひとりで、世界の維持神。慈愛の神としても知られ、この神に心から信仰をささげる者に恩寵を施すと信じられている。円盤とこん棒、法螺貝、ハスの花を持ち、ガルダ鳥を乗り物とする。悪を退治するため、人や動物に姿を変えて救済に現れる。各地方の土着の神々をその化身として取り込んでいるため、全インドで人気が高い。



■ シヴァ

聖山カイラーサで瞑想する苦行者の姿で表される破壊の神。トラの皮をまとい、蓬髪を巻き上げ聖紐としてコブラを身に回している。乗り物はナンディーと呼ばれる乳白色の牡牛。宇宙の創造と破壊を象徴するダンスを踊るとされ、舞踊の創始者ナタラージャとしても有名だ。



■ ガネーシャ

シヴァとパールヴァティーの長男で、商売と知恵、学問の神。ゾウの頭と大きな太鼓腹をもち、ネズミを乗り物とする。障害を除去し、福をもたらす神としてインド全域で信仰されている。物事を始める前には必ずこの神に祈る習慣がある。



■ パールヴァティー

シヴァの神妃。ガネーシャの母親とされ、ウマー(母)とも呼ばれる。貞淑な妻としてのサティー、ライオンにまたがり、水牛の姿をした悪魔と戦うドゥルガー、黒い体にドクロの首飾りをして赤い舌を出したカーリーと、さまざまな形で崇拝される。



■ ラクシュミー

ヴィシュヌの神妃で、富と幸運と豊饒を司る。アムリタ(霊薬)の壺とハスの花を持つ姿で表され、手のひらから金貨がこぼれ落ちている。ヴィシュヌ神が化身するたびに、それぞれに呼応して従う貞淑な妻のイメージが強い。仏教にも取り込まれ、吉祥天と呼ばれる。



■ ハヌマーン

ラーマ王子を助けて活躍する神猿。叙事詩『ラーマヤナ』のなかでは、ラーマ王への無私の忠誠を誓い、体の大きさを自在に変え、空を飛んだり山をもち上げたりして大活躍し、庶民から圧倒的人気を得ている。『西遊記』の孫悟空のモデルになったと考えられる。



■ クリシュナ

ヴィシュヌの化身のひとつ。ヒンドゥー教の神のなかでもスーパーヒーローともいえるほど人気がある。いたいけな赤ん坊の姿、バター泥棒などのいたずら、牧女(ゴープー)たちとの戯れの場面など、その姿は多彩だが、肌は常に青黒く描かれ、横笛を手をしている。



■ ラーマ

古代コーサラ国の王子伝説をもとに成立したインドの国民的叙事詩『ラーマヤナ』の主人公。後にヴィシュヌの化神のひとつとして重要な神格となる。妻シーターと弟ラクシュマン、神猿ハヌマーンとともに祀られることが多い。持ち物は大きな弓。



これらのほかに、南インド固有の神々もいる。彼らは古くからドラヴィダ人の中で信仰されており、ヒンドゥー教が浸透するにつれ、ヒンドゥーの神として信仰の対象となっていく。もとはマドウライの守護神で、「魚の目をもつ女神」といわれるミーナークシーや、ミーナークシーの夫で、後に兄とされたアリヤハル、戦いと勝利の神ムルガンなどがいる。



《インドの花》

17時30分、デリー着。ムアツとくる大気。「インドはチェックが厳しい」であったが、さして点検する（パスポートと、ビザと、e-ビザ）でもなしにイミグレーションを通過。どこに6番があるのか分からないが、尋ねると、後ろを指さされ、そこから大回りして荷物のターンテーブルへ。そして出口へ。そこでガイドに腕を引っ張られ、振り返ったら、6番の表示が上に見えた。ここで、総勢7名、男性3名、女性4名の内訳も分かった。それはラッキー！

＜このインディラガンディ国際空港での出入国は、「地球の歩き方」p.76～77にある。体験後なら、この通りだった…になるが、先に見たら判る…ものでもない。外国人が後ろ側の通路を通るのは確か、そこにアライバルビザカウンターがあって（なかった）、荷物を受け取り、最後の最後に6番なのだ。そんな最後の最後の6番表示を、早い段階から探していたら、ない！ない！になってしまう。この部分こそを、拡大コピーすべきだった。懶巧になった！＞

ちょび髭の現地ガイドに付いて外へ出ると、まさに暑季のインド。左の空きスペースでバスを待つ。ニラジ・プリさんの、ニラジとは蓮の花の意味だそうだ。迷子になった時の、連絡用紙片を受け取る。パスポートの次に、大事と言える紙片だ。

18時20分、ゆったりとバスに座る。「インドは、動物園へ行かなくてもいい国で、牛、ヤギ、サル、リスなどが当たり前にあります」という。「インドへ来たら、

比べないこと。ここはインドと楽しんで下さい。」「でも、まず水には注意して、ミネラルウォーターだけにしてください。」「トイレは20ルピー。インド式は後ろが穴です。ホテルやレストランは西洋式で、無料です。そちらで済ませて下さい。」「ここで両替をします。帰るときに余れば、逆の両替もします。」「500ルピー札を100ルピー5枚に両替してもらった。



《夏毛のリス》

すぐ、アショカカントリーリゾートに着いた。部屋の設備の点検をしてから、下のレストランへ。

円卓を7人で囲んだので、すぐ自己紹介をしてしまうことにした。

1名様一室同旅行代金のせいか、2名で一室は私達だけだった。中学からの同級生で、今回は中国ツアー潰れで急遽決めた行き先ですと紹介。中学からの長い付き合い…には感心された。

70代らしい横須賀からの山口氏は、旅行代理店のようなのを、シンガポールや香港、台湾で15年ほどやっていたらしい。柔道や、ジムをやっているという締まった体付き。

30～40代の男性二人は…この世代と一緒に初めてだが、気が合ってよく同行しているらしい。山口県出身の金茶髪のタク君は、振付やダンス指導をして、子供にも母親にも慣れているようだ。2月にトルコに行った時には70人の参加で2台のバスを使い、同行者を覚えるどころではなかった。おまけに楽しみにしていた気球は、全社が飛ばない日に当たってしまったと言う。大柄なトシ君の方は料理店のオーナーをやっていたが、売り払い、今は自由にやっていると言う。二人とも気楽に英語を使い、よく気が付き、人当たり

もよくて、東京暮らしで、自由業の若い世代は、こんなふうなんだ…と思った。



《花売りとポーズ》

イタリアへ行った時の20人も多すぎだったと言う、美瑛からのひろ子さんは、母も連れて北海道へ渡ったが、その夫とは別れて、母の介護をしつつの日々と言う。スピリチュアルに嵌まり、そちら系はよく知っていて、自由業君達とは話が通じるようだった。

半分ピンク染めの髪が印象的な洋子さんは、昨年父が亡くなり、それから行く先々で遺骨を撒いているそう。今回はもちろんガンジスに流し、旅好きだった父を送るそう。躊躇することない探求心旺盛そうな人だった。この二人は親の歳から行くと、60代あたりか？



《ボート上の旅仲間》

自由な生き方が当たり前の時代が来ている…そんな人達が行こう！になるのがインドか？フランクで、愉快的旅になりそうだった。

マンゴーラッシーを頼む。これが400ルピー。

両替分は、飲み物代で消えていくようだった。

さて、部屋のお湯はちゃんと出たけれど、バスタブから水が引いていかない。継ぎ目から漏れているらしく、床に水が溜まりだす。バスタオルで吸い取っては、洗面所で絞る。この分ではトイレの排水も心配。こっちはペーパーをセットするのか？のような棒状レバーを下に下げたら、ザッと流れて、一安心。

◇5月15日（金） デリ～ベナレス

早々に挨拶が「ナマステ」と知る。ネパールと一緒にあれ？ネパールがインド文化圏ってことか？書いてある文字も、上に線を引いたあれ。デーヴァナーガリーという表音文字系だ。広いインドには公用語だけで22ある。北インドはヒンディー語が話され、その表記が、サンスクリットと同じ字体を使うらしい。

ニラジさんとさっそくツーショットを撮っておく。



《ニラジガイドと『ナマステ』》

朝から、やはりカレーの類のようだ。多くの外国人がイメージするインド料理が、北インドの料理となるらしい。夫のせい(?)で、和食をはみ出さない私はナンくらいだが、小麦系はいろいろある。また、ネパールは行っている方だが、それがまたトレッキングに偏っているから、チャパーティーの類になる。ローティー、パラター、プーリ、パトゥーラとあり、焼いたものより揚げたものの方がより清浄とされる…とある。それにしても、夜はともかく、朝から揚げパン類に、ピリピリカレーばかりは…。トシ君が「彼は、朝食をとらない主義だから、心配しないで」と、来てい

ないタク君の説明をする。また、二人が時々野外へ消えるのは、喫煙のため…も、判ってきた。

洋子さんが、屋上に孔雀がいるのが見えたということで、食後、彼女の部屋へ見せてもらいに行った。いなかったが、スマホで見せてもらったのはたしかに孔雀。地上で飼うと犬にやられてしまうから、屋上に別飼っているのだろう。さすがインド！

今日は、クトゥブ・ミーナールを見たら、また飛行機移動だ。移動時間があったくないが、それくらいの座り移動時間を挟まないと、この暑さで全部を野外の観光で過ごすのは無理とも思った。

ニラジさんがインドの説明を始める。14億人の人口は世界一で、年齢も若い、仕事がないそうだ。彼は元はIT技術者で、日本に興味があり、日本に行きたくて、日本語学校にも通ったそうだ。だが、それは父親の反対で叶わなかった。その後日本からの企業視察をガイドする機会があり、ガイド業もおもしろいと思ったという。それで正式なガイド資格をとった。これは結構難しい資格で、資格なしでももぐりのガイドはできるが、きちんとした情報を伝えられないと思うという。その後はガイドの方が面白くなり、あちこちのツアー会社からの依頼を受けているという。英語のガイドもできるが、その国の言葉では何というかや、どんな話題に興味があるかの勉強が必要ですから…と日本に特化しているという。確かに、彼は「象嵌」という言葉を聞き返してきたり、チャラチャラガイドではなかった。山口氏が聞き出したところによると、彼の息子は大阪の大学を卒業し、今はインドのSUZUKIに勤めているそうだ。

そしてまた、彼は「ほとんどの行き先が撮影可」と言う。兵隊、警官、チェック施設などがダメ。また、「インド人は写されるのを喜ぶだけではなく、一緒に撮りたがる」と言う。「今日は日本人と会いました」と、珍しい、いいことがあった内として、周りに見せたいそうだ。「だから、写されて困るのでない限りは、一緒に写されてあげてください」と…。「写したらお金をせびられます」でもなく、「なれなれしい人に用心してください」でもなかった。

通勤通学の時間帯で、多くのバイクやオートリキシャが行き交い、路線バスを待つ人がいる。そんな路肩や、中央分離帯に、のんびりと牛がいる。校門脇にも、いい居場所を見つけた牛が、悠然と出迎えをやっていた。



《校門前の牛》

盛夏のインドは黄色のゴールデン・シャワー・トリーに染まっている。世界遺産に登録された遺跡群は広い敷地の中にある。樹々の間をライトグリーンのコがけたたましい鳴き声で飛び交い、シマリスが幹を伝う。たしかに、動物園レベルだ。



《クトゥブ・ミーナール》

クトゥブ・ミーナールはインドで最古で最大のミナレットとして知られる。イスラームによるインド支配を示す象徴として建設された。インド最初のイスラーム系支配は12世紀、クトゥブッディーン・アイバク

から始まった。勝利の記念塔の意味をもったミーナールは、基部は直径 14.3m、高さ 72.5m、5 層から成る。もともと存在していたヒンドゥー教寺院を破壊し、その石材を利用しているため、偶像崇拜を認めないイスラム教なのに、いたるところに元の動物や女神の姿が残っている。もちろん廃仏毀釈と同様、破壊し捨てたままの石材もある。

この 2 倍をめざした、より入り口近くのアラーイー・ミーナールは、基部の直径 25m で着工したが、命じた人が暗殺されて中断の、残骸のまま。



《アラーイー・ミーナール》

ミーナールの表面には、コーランの章句が刻まれている。この中に 379 段の階段があり、かつては登れたが、見学中の子供たちがドミノ転落死する事故があり、閉鎖となったようだ。

ここのお勧め写真ポイントがあると言うので、隙間を通り抜ける。なるほど、廟の後ろに立つという位置になる。緑の特徴的な葉をたわわに茂らせているのがアショカの樹。

手前のイールトゥミッシュ廟に入ると墓がある。上に寝かせた柱がついていれば男性、なければ女性。

ヒンドゥーのリングも真ん中の柱が男性器で、周囲の輪っかが女性器を指す。日本人にはあからさますぎるが、男女の交合で子孫が繁栄する。それは卑猥ではなく大切で、「生きる」の根本なのだ。だから正規の結婚は同じカースト内で、高僧の占星を経ての見合い結婚となり、結婚の 9 割を占めるようだ。

動物なら婚姻色になったり、激しい喧嘩やダンスをしたりで、繁殖相手を選ぶ。より健康そうな相手と自身の遺伝子が残るように励んでいる。

ちなみに、LGBTQ というのは、差別までしなくてもいいのだが、そちらの人権云々の前に、もっと大事なことがある。普通に男と女が結婚し、父と母になって、子供を慈しむ家庭を作る。それが基本になって、社会は維持され未来につながっていくのだ。生物を教えた身としては、わざわざオスとメスを作る選択をしたのに、捻じ曲げたり、もてはやしたり、煽り立てたり…もヒトの愚かと思う。投資の前に、勤勉と貯蓄を教えるべきであって…まあ最近のあれこれが私には気に食わないのだ！



《イールトゥミッシュ廟の中の墓》

おとっとと、ここからクトゥブ・ミーナールの奥に見えているのがアラウッディーン・マドラサというイスラームの神学校で、国内最古のものという。きちんと若者を育てていく…が国の未来だ。

ニラジさんが、「もう一か所お勧め撮影スポットがある」という。クトゥブ・ミーナールが逆光にはなるが、ちょうど太陽が隠されて、塔に後光がさしているように見えるのだ。しかもその上を頻繁に、ジェットが飛んで行く。



《後光が差すクトゥブ・ミーナール》



《2千年錆びない鉄柱》

そこから出た先の、高さ7mの鉄柱 Iron Pillar は、3～4世紀のグプタ朝時代に造られたとされ、サンスクリット文字が刻まれている。鉄の純度が100%近く、いまだ錆びていないという不思議な鉄柱。ニラジさんは「これを後ろ手で囲えたら、願いが叶うそうです…が、鉄柱を傷つける人がいたので、柵が作られてしまいました」と言う。

他がなかなか来ないなあと思ったら、インド女性の一団に洋子さん達が混じって、タク君が、スマホを預かっては賑やかに撮影しているところだった。



《撮影で交流》

その先の、破壊されたヒन्दウー寺院やジャイナ寺院の石材を使って建設されたモスクが、クワットウ

ル・イスラーム・マスジッドだ。回廊部分に昔の石材が残る。根気と信仰で刻まれた列柱は見事だ。

これらは、VRで見ればいいというものではない。広い庭にプルメリアやハイビスカス、ジャスミンが咲き乱れ、点々と遺跡があつて、インド人のサリー姿の観光客も行き交つて…の上で残る思い出だ。



《回廊の美しい石柱》

そこから雑貨店に移動しショッピング。「今回の予定はびっしり詰まっていて、まとまった時間が取れるのは、今日のここだけ」だそう。そして「インドでは坊さんの占星術で、お見合い相手や、結婚の日取りや、諸々を決める」という。最近、あまりに結婚しなかったり、すぐ別れたりの話ばかりを聞くので、占いのせいにして出会い、運命と考えて寄り添うのも、知恵の内かも？とも思う。ともあれ、「宝石の国インドにおいて、パワーストーンと珍重されているのがスタールビーで、第一のお勧め」だそう。

そこは日本人用の、一応言葉が通じる高級土産店だった。覚悟？はしていたが、ああやっぱり！の親のくれた土産品がいろいろあつた。インドで38年前に買っていたということだ。

それは、私が幼い三男坊をかかえつつ、60人の生徒の指導に、真夜中に起きて教材のセットや寸評書きに追われていた頃…。親がどこへ行つていようが関係なかった大昔だ。この手の工芸品が好きだったのであろう…実家には、大きな額に入れた絵や、別送扱いにしたのであろう、大型のヒन्दウー系の神の真鍮像もあつた。



《お土産店》

私にも、好みの方だったけれど、私が引き取れば、今度は息子が廃棄に困ってしまう…。やむなく、ごみも値打ち品もまとめて引き取って、相殺するという業者に委ねた。それなりに悩んで手放す判断を下したのだから、もっと小型の像にしたところで、買うわけにはいかない。



《ホテル玄関のガネーシャ像》

第一もっと先に、私はネパールに嵌まっている。ガネーシャとか、仏陀像とか、さらにはマニ車といった仏具系を、ネパール展として一通り並べられるくらいは、今も持っている！パシュミナシヨールだって、何色も持っている。金沢市の国際交流祭りに、石川ネパール協会のブースを出すからと頼まれ、そこでの販売用の品も、何度もスーツケースに詰めて帰国していたのだ。サリーの着付け体験もやるから…と、それだって、何枚も持っているのだ！

今回は、用心の魔除け（買わない！）用に、手持ちのネパール系のアクセサリーを、珍しくつけるようにしたくらい…。

店員は私の視線の先を追って、次々と、あれは？こちらは？と前に並べてくる。その度にこっちは、ダメ！ダメ！と目をつぶり、煩惱を振り払う。余計汗だくになってしまった…。

ユニークな洋子さんは、真鍮製の弁当箱（円筒の段になっていて、ご飯とカレーを分けて詰められるタイプ）が一番の希望だったが、そういった庶民の実用品はおいてない。そこで、大理石のタージ・マハル、ローズクォーツ製で染め入りのガネーシャなどを選んでいった（夕方のホテルで見せてもらった）。



《ホテルフロントのガラスケース》

ひろ子さんは、最初からガネーシャ好みだったが、精巧なものは、4万円とかどれも高かった（ネパールで私が買った木製や石製は1,000円レベル）。

トシ君は、一番のお勧めとされるスタールビーに迷っていたようだった。でも、綺麗と思えるルースは10万円だった。この手の物は、私は通ではないけれど、日本人価格になっていて、割安とまではいけないものだ。

啓子ちゃんは、大理石の宝石象嵌の小箱に迷っていた。彼女も、バリ島で本物のバリ更紗を買ったのだからと、まずお金を減らすブレーキをかけ、次に、カードを持たずに下車としたのだが、5,500ルピーの品だった。私は私で先の手持ち煩惱物品の中に、この手の大理石に象嵌タイプの土産はなかったから、800ルピーと言われた小象なら、買ってでもいいかと思っていた。

いよいよ時間切れが迫り、「小箱と象を合わせて、1万円」に折れることにし、私が現金立替払いにした。どちらの決心も崩れてしまったが、値切れたからよしだ。

ただ、最終日のアグラの高級ホテルのフロントのウィンドウに飾ってあった品が、ちょうど、私たちが買った品ばかりだった。目利きといえる買い物ができる…と解釈しておく。



《大理石に宝石を象嵌したお土産》

次は国内線でベナレスへ移動だ。このベナレスが、Varanasi(Banaras)で、ワラーナシーとあったり、バナラスであったり。最初、ガイド本で探せなかった。次には、「ラ」が先か? 「ナ」が先か? にもなった。デーヴァナーガリー表記なら、もっとお手上げ。中国語も、漢字は分かるとして、発音は全く違うから、地名も結構厄介で聞き取れず、困る。

その前に、ニラジさんは、チケット枚数を何度もチェックしていた。添乗員なしということで、羽田ですでにボーイングチケットを、乗り継ぎ分を含めた2枚で受け取っていた人、私達のように、デリーまでの1枚だけだった人…と、バラバラになっていたからだ。これも、Zカウンターにいた職員が、きちんと指示すべきことだったと思う。

ランチは空港内に入ってから、「南アジアのドーサ」を頼むとなった。ボーイズは、「ケンタッキーチキンのブースへ行く」と言う。そういった軽食ブースが並んでいる。

ドーサは米と豆のペーストを発酵させた生地を、鉄板でクレープのように焼いたもの。これが、とんがり

帽子のように巻かれ、豆のマッシュのようなのが3品、カレーソースと漬物が、大きな圧縮紙皿に乗っている。パリッとした食感ながら、指先は油でべっとり。その後ベルギーチョコドリンクで、お口直しをした。



《南インドのドーサ》

14時離陸。国内線にはディスプレイがついていない。1時間の飛行で、トランクをまた受け取り、外へ出る。午後の猛烈な熱気。向日葵ならぬ、ゴールデン・シャワー・トリーの真っ黄色の花棚の下に、ずらりとオートリキシャーが並んでいる。もっと小さなバスに乗り換える。田舎町ワラーナシーの方は道路が狭く、ガンガー(ガンジス河)近くに寄りつきにくいからだ。



《ゴールデン・シャワー・トリーと
オートリキシャー》

ホテル玄関では、さっそく歓迎のティカを、額につけてくれる。吹き出す汗で、たちまち、たらたらと流れてしまった(自分には見えないが、拭き取ってもらった)。他の人達は顔に汗をあまりかかないらしい。どっちが暑熱順化をしているんだろう? それとも歌舞伎役者のように気合か?



《ティカを塗られて》

ウエルカムドリンクを飲みながら、洋子さんのショッピングの戦果を見せてもらう。お母さん用、弟用…と上手に選んでいる。私は、先にネパールで嵌まってしまう、今回はブレーキをかけたことや、最初は相場も値切り方もわからなくて、仏陀の石像に言い値のままの\$40を渡したら、相手がさっさと店を畳んで帰ってしまった思い出を話した。洋子さんも「私も、最初は言い値で買ってしまっていました」と言い、みんなで笑った。



《ガンガーに寄りつく》

ガンガー（ガンジス河）は、ヒンドゥー教の女神ガンガーが地上に降りた姿とされ、ヒンドゥー教徒の信仰の対象であり、この河の水で沐浴すれば、全ての罪は浄められ、死後の遺灰をこの河に流せば繰り返される輪廻から解放されると信じられています…とある。また、女神ガンガーは、クンビーラ（ワニ）に乗り、

クンビーラは日本では「こんぴら」として音訳され、海上交通や水運の神として信仰されている。

ワラーナシーはヒンドゥー教最大の聖地で、シヴァ神の聖都。ヒンドゥー教の聖典ともいえる叙事詩『マハーバーラタ』にも確認でき、紀元前6世紀、仏陀誕生以前には、もうバラモンの修行拠点になっていた。破壊と再生を繰り返し、18世紀になってから、岸边はガートとして石造りに整備されたとある。火葬場のために存在する町なのだ。84のガートが、左岸に並び、右岸は朝日を拝むために建築は禁止されている。一番賑わうのがダシャーシュワメード・ガートで、2か所の火葬場の大きい方が、マニカルニカー・ガートだ。

今日はダシャーシュワメード・ガートで、夕刻の祈り、アールティー・プージャを見る。合掌像が見えたら、そこから階段が下がっていて、ガンガーに続く。途中の露店にあったミニポリタンクは、ガンガーの水を汲んで持ち帰るためのものだ。想像通りの広さで、想像通りの緑色で、気温と同様に、のたった水面だった。目立つほどのゴミはないが、水中は見えず、うっすら油膜もある。…信心の世界だ。

まず、水際にまで近づいて、足浴を体験とする。さっそく花売りが近づいてくる。10~20ルピーらしい。ニラジさんが「まとめて払うから、みんな灯明流しを体験して下さい」と言う。今は雨季の直前、水位が一番下がっているあたりらしい。



《灯明売りの親子と》

灯明を中心に、周りをキンセンカで埋めた花皿に点火して、そっと水面に浮かべる。ゆっくり、川下に向かって流れていく。ついでに、短パンにしてきた人達は足浴

にかかった。啓子ちゃんもつけてみて、わりとひんやりしていたそうだ。



《ガンガーに足浴》

花売り親子とも写真を撮ってから、プージャの会場に座る。前座の歌手が、アザーンのような祈りを捧げ、次には激しい太鼓に乗せた、切れ切れダンスがつきそうな歌を延々と…1時間。いよいよ暗くなり、明かりがついていくと、観客との掛け合いを始める。何かわからないが「シャディバ シガレー！」で、手を振り上げ、おひねりを渡すようになってきた。お尻がもう痛い…。観客はさらに増え、タク君達と写真を撮りたがる人が増え、次には引っ張り出されて、一緒に踊りまくることになった。やっぱり、その手のオーラが出ているのでしょう。



《インド人と一緒に踊るタク君》

ようやく、7つの祭壇に、花卉が盛り上げられ、ろうそくが手配され、19時、赤い僧服が並んだ。教文？を唱えつつ、左小脇のベルを振り、右には線香束を持

ち、ぐるぐる回す。四方に向きを変えていく。次には、香合に持ち替える。今度は大きなツリー状の燭台を火をつけたままで回す。望遠でアップにしてみたら、なかなかのイケメン揃いだった。そのあたりが終盤で、ニラジさんに呼ばれる。

指差されるまま、左の端に行ったら、7人全員を斜め後ろから撮影できるポイントがあった。



《アールティー・プージャ》

観客は老若男女で、女性は様々のサリーを着ていて、いろんな風に着付けていて、褐色の恰幅のいい体躯にも似合っていて、やっぱり民族衣装だなあと思った。それに金沢で見かけるようなインバウンドを見なかった。オフシーズンにあたるからなのか？それは判らない。ただ、普段着のままの自然なインドに混じったようで、暑さとともに、インドを体感する旅といえそうに思った。



《遅くなった夕食》

バスが近くに来てくれていて助かった。夕食は、バイキングで、一応皿にとってはきたがが、その後に、

追加料理が次々と、席へ運ばれてきた。ナスの揚げ物や、空心菜や、クリスピーチキンや…。今さらながら、ピリ辛系を普段からやっていないから、おいしそう！にはなれない。どちらかといえば辛い。ああ、つらいと、からいはい同じ字なんだなあと感心したのだ。

◇5月16日（土）ベナレス～アグラ

日の出を舟上で迎えるために、4時15分発。けっこうきついスケジュールだ。沐浴するかも？の人達は、着替えとタオルを用意している。



《ティカ売り》

薄暗いけれど、朝の沐浴のために、町はずでに動いている。ダシャーシュワメード・ロードがメイン通りで、露天や、物売りがたくさん出ている。赤や黄の粉缶を並べているのは、ティカらしいなと通り過ぎたが、船着き場に到着して振り返ったら、ひろ子さんも洋子さんもしっかりつけてもらってきた。今度のは黄色をベースにして、さらにシヴァ神の矛を朱色でスタンプしたタイプだ。そりゃあ、体験した者勝ち、楽しんで者勝ちのあたりだろう。



《ボートがぎっしり》

下の広場には、暑い季節のせいもあるが、そのまま野宿したらしい人たちが寝ていて、家族で沐浴の準備にかかっている人達もいた。

ぎっしりの小舟をどうするのかと思ったら、3艘ばかりの舟ペリを歩いて先の方の小舟に渡り、腰掛けてから、両脇の舟を押ししたり、傾けたりして、掻き分け出るのだった。舟とは浮力を使った便利な乗り物だ。救命ベストを巻いた。舟から振り返ると、かなたまで広がったガート群だった。

まず、下流の火葬場マニカルニカー・ガートに向かう。マニカルニカーとは宝石の耳飾りのこと。ヴィシュヌ神が自ら掘った池のほとりで苦行に励んでいると、シヴァ神が現れて何でも願い事をかなえる約束をした。シヴァ神のいるこの都に永遠に住みたいと言うと、シヴァ神は喜びにうちふるえ、耳飾りが池の中に落ちたという神話に由来する。



《マニカルニカー・ガート》

ワラーナシー最大の火葬場で、24時間火葬の煙が途絶えることがない。死者はガンガーの水に浸され、薪の上で火葬され、遺灰は火葬場の仕事をするカーストの人達によってガンガーに流される。ヒンドゥー教徒は墓を持たないが、命日などには祖先供養を欠かさないようだ。

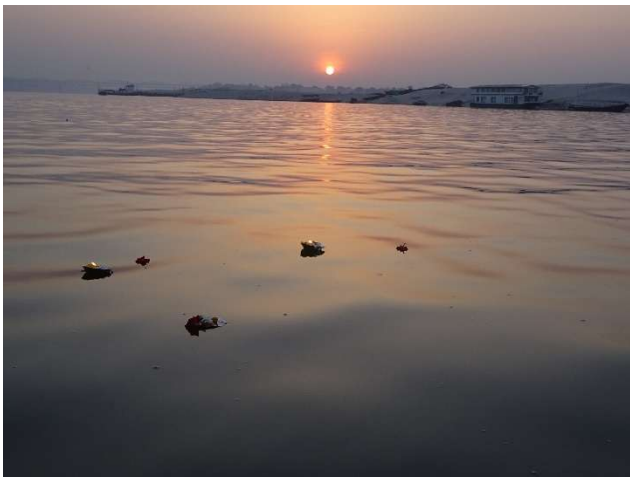
これも、ネパールのパシュパティナートでもう見ているから、おじげづかない。流して、浄められると信じて、骨も残さない…は、賢い教えだなあと思ってしまう。どこから、葬式仏教やたかり仏教に成り下がっていったのだろうか？ 煩悩を救ってくれていないではないか？



《ガンガーの水で浄める》

2体の躯が黄色い布に覆われ、ガンガーの水を掛けられている所だった。そこから反転し、上流に向かう。昨夜のプージャの会場も判れば、いくつかの寺院があったり、川岸が全て階段になっているのが見える。反対の右岸の砂浜は、朝日が見えるように建築が規制されている。

5時15分、朝日が上がった。水蒸気が多くて、かすんではいる。またも花皿をもらい、祈ってから流した。



《ガンガーの朝日》

右岸の方が浅瀬になっていて、沐浴しやすそう。沐浴を始めている人達がいる。昨日は「胸までにするか?」と言っていたボーイズは「やっぱりやるぞ!」と脱ぎだして、パンツ1枚で下りていった。サリー姿の現地女性も手を取りあっては、ザンブと頭まで浸かり、朝日に向かって祈っている。タク君も頭まで浸かった。ひろ子さん、洋子さんも下りていき、山口氏も

上着を脱ぎ棄てていった。舟は停まったままだし、私も足浴まではやることにした。そしてトシ君にそれらしく撮ってもらった。



《ガンガーで足浴》

満足気な一行を乗せ、対岸の賑やかな岸の方に移動。向こうは深そうだから、手前にプール状の仕切りを作り、その中での沐浴としている。一番賑やかな場所は前に置かれた舟が邪魔をして全然見えなかった。それにしても、ちょっとそとの規模ではない、ガートがずっと並んでいた。洋子さんは亡父の散骨も無事済ませたそうだ。

戻りも、義経の船渡りのごとく、舟から舟へと跳んでのご帰還。ガートはまだまだ賑やか。傘が立っている場所は、その下でバラモン僧が説法をするのだという。



《バラモン僧の説法場所》

ダシャーシュワメード・ロードを引き返していくと、まだまだこちらへ歩いてくる人達が多い。露店はもっ

と増えた。明るくなったから、花売りやティカ売りを撮影。土産物売りも多かった。これに関しては、一切無視すること。「ノー」も「いくら？」も反応するな。ずつつきまとわれるからとのこと。そう聞いていた分の余裕？があったから、同じ服のが前になり後になり、ずつついてくるんだ…と判った（ネパールで、さんざん経験済み。そんなオーラを出しているのか？と反省したが、相手にド根性あり）。洋子さんは値切って、と言うか、バラマキ土産用に、マグネットの枚数をどんどん増やさせていって、バスに乗る間際について買った（勝った？）ということだった。

ガンガー水を少しでも混ぜれば聖水になるそうだが、さすがにペットボトルに入れて、まじまじと見たら、ウツになるだろう。でも、ヒトの40兆個の細胞に対して、腸内細菌は100兆個と言われる。そういった夥しい微生物と共生している身が、「汚い」という表現をガンガーに使えるか？



《花売り》

ヒトは前頭前野が暴走する一方で、「大河の一滴」という考えも、持ちうる。時間の大河の一瞬を生きるだけと、悟りもできるのだ。遺骨を流し、同じ河で沐浴の人々は、悪あがきとの行ったり来たり迷いを埋めるがごとき光景だ。「まず、ガンジス河を見ることです」のフレーズには得心できた。

ニラジさんも年に2回は家族で沐浴に来るのだという。近くの寺で祈ってもらってから家族で浸かる。生活に溶け込んでいるのがガンガー信仰だ。

シャワーを浴び、ゆっくりの朝食。ボーイズを「ちゃんと頭まで浸かるなんて凄いね！」と褒めたら、「節

子さん達も、階段をばんばん上がっちゃって、体力凄いです！」と褒めてくれた。みんないい人になっただぞ！ガンガー効果か？



《朝食》

本出発に向けて、フロントに行くと、洋子さんが外出から戻ってきた所だった。身振り手振りで、リキシャと交渉し、「20分内」「100ルピー」の条件で、周辺を走ってもらったのだと言う。そうしたら、民間の小さな寺院に寄り、そこでの沐浴風景を見せてもらえたそう。だが、下車の際に「50ルピーで」と値切りを交渉したら、反対に「おまけに回った」とアップを要求され、150ルピーになったうえ、同業者が「チップも払え」と言ってきて、10ルピーを加算。「でも320円で済んだ冒険だもんね」と。彼女は、そんな風に、これまでも、自力での冒険も楽しんできているらしい。私は勇気がないと、まず無事に帰るのが、夫への責任と感謝だとは思っている。洋子さんは、そういう旅の映像をインスタにアップしているそう。ひろ子さんがさっそくチェックすると、愛用のミニキャラクターを添えての画像が出てきたそう。私は景色を茶化しているように感じる方だが、今時はアニメオタク男子も、嵌まってやっている。旅の楽しみ方はいろいろ…。

9時30分発。仏教四大聖地の一つ、サールナートに向かう。一帯は田舎町だ。仏教の開祖仏陀のゆかりの地には、誕生の地ルンビニ、悟りの地ブッダガヤ、初説法の地サールナート、入滅の地クシナガルの4つがある。

初説法は初転法輪ともいう。悟りを開いた仏陀が、古代インドの学問の中心地であったサールナートへ行き、かつての5人の修行者仲間と、鹿たちに、初めてその真理を語った。その時ならではの、静かな自信と慈愛に満ちた表情が美しい仏陀像があるという。



《ムルガンダ・クティー寺院》

広大な敷地に、ムルガンダ・クティー寺院がある。ここの金のブッダはレプリカで、寺院内の壁画の方が、日本人には見るべき物。日本人画家の野生司香雪が、仏陀の生涯を描いている。

私達はとりあえず浄土真宗で、葬式仏教には一番付き合ってきた。宗祖に関しては、手塚治虫のアニメ「ブッダ」が入力量としては一番多いかも…漫画で勉強の走りだ。どのシーンも思い当たりはする。

ただ、この仏陀の生涯と「教え」に、現在の大伽藍を構える葬式仏教がどう結びつくかは、不明で不可解のまま。



《日本人の壁画》

ブッダ本人に著述はなく、弟子が教えをサンスクリット語での經典としている。それは最高の教養にあたる。だから庶民が学び、理解するというものではなかった。それが漢字の国中国では大量の經典を生み、それを解説するのが修行だった。葬儀となれば、今も、呉音読みでか？抑揚をつけた読経があり、庶民は仕方なく？耐えている。先日の若いW氏の葬儀も、わざわざ出身地輪島の菩提寺から呼ばれた女性僧が、読経した。有髪的女性僧が「お髪剃りの儀」を行ったから、まさに形骸化そのもの…。なおのことパフォーマンスのレベルとも思った。

私は、緩い程度で、墓はいらないと思っている。

バリ島、ガンジスで、ますます捉われなくてもいいと思えるようになった。そのあたりは、宗教学者の島田裕巳氏が多数の著作で語っていて、一般庶民の管理のために、江戸幕府が仏教を活用し、利害が一致したことによる。その反動は明治になっての極端な廃仏毀釈にもなったが、特に浄土真宗において、南無阿弥陀仏で往生できる信仰や、農村の秩序維持には役立った。

閑話休題。灼熱の外へ出て、少々涼んだのが、あれ？チベット仏教寺院の五色旗とマニ車。ここは、各種の宗教者が集まる地だったらしい。メイン通りを歩いていくと「さちこの店」の看板に吊られた。夫がインド人の、本物ばかりを売る店だという。入ってみたら、まさしく、両親のお土産そのものの類が並んでいた。菩提樹の浮彫仏は、父が伯父に見せたら「ありがとう」を言われて、返してといえなくなった…の説明付きで、その同類をもらったという思い出つきだ。大小があって、透かし彫りもあって、素朴な木彫り系は1,000円から5,000円内外。その代わりにカードは使えない。ひろ子さんの1万円崩しを手伝い、ついでに私も、小さな木彫りの囊を買った。

ガイドブックにあった、ずんぐりのダメーク・ストウーパが見える。この中は埋まっているのか入れない。周囲の柵に、一帯の発掘写真があった。見覚えのあるアショカ王の獅子の石柱も、ここにあったのだ。ストウーパを一巡りしても、かつての入り口にあたりそうな跡はなかった。



《ダメーク・ストゥーパ》

多くの僧院の土台らしきがある。アショカ王の石柱跡だけはガラスの箱に覆われている。しおりに載ってはいないが、ニラジさんが「博物館の宝物は、ぜひ見てほしかった」と言い、そのための時間調整をしてくれたらしい。

バッグ類をゲートに預けて、サールナート博物館に入館。ブッダは紀元前 563 年に生まれたとされるが、ストゥーパなどは 5 世紀頃の建立だ。発掘されたヒンドゥー系の石像もいろいろおいてあって、メインが例のブッダだ。そういえば、自身が阿弥陀仏やら、文殊菩薩やら、そのあたりもはっきりしてはいないのだが、初説法時のブッダは、きれい。国宝の仏たちが、半眼で無表情のように見えるのに比べたら、この石像は、なんて優しく微笑んでいるんだろう。言葉も時空も越えての美…。



《初説法時のブッダ》

そして、石柱の頭部におかれた獅子も見事だった。紀元前 3 世紀、アショカ王が、聖地の証として建立。東西南北を示す、獅子・象・牛・馬の四聖獣の台座の上に、さらに四頭の獅子が乗る。磨かれた大理石が光っていた。石製なら、残るのだ。



《アショカ王の獅子の石柱》

お昼はビリヤーニ。単語として聞き覚えがあるだけながら、やはり北インドの名物料理。濃厚なグレーヴィーと香り高い米と一緒に炊き込んだインドの炊き込みご飯…とある。一晩掛かりで…というのは、土器に材料を入れ、密閉して、蒸し焼きする料理なのだ。目の前で封印を切ってくれた。おいしかったが並の量ではない。持ち帰りしたいくらい余った。ピリ辛が残る口に、アイスクリームがおいしい。のんべえ洋子さんは、この後の電車に缶ビールを持ち込めるか？に悩んでいた。



《ビリヤーニ》

そしてベナレス駅へ。トランクをまた運ぶ。インドの鉄道時間はあてにならないらしい。乗る列車はもう停まっていたが、風の通るプラットフォームで待つ。目の前の給水施設には盛んに人がやってきて、飲み、空きボトルに詰めていく。暑さで、ホームに寝転んでいる人も多い。

さっきから子供3人がしつこく、無心してくる。20年前は、たしかに真夜中のネパールに降り立った途端「100円」「100円」と囲まれて、ルンルンが吹っ飛んだ覚えがある。今は、やはり、途中で物乞いがいたけれど、外国人が子供に、それを覚えさせてもいいか？喜捨なのか？は、別問題だろう。実際、老婆に叱られていたし、警官を見ると、逃げていった。

ここの売店で、マンゴージュースのペットボトルを買ったら40ルピー。レストランの飲み物は、外国人用価格になっている。

ここから5時間の乗車。このツアーは移動時間が長い、さりとて全部の時間を観光にして動き回れるか？であって、特に、暑季の今回はこれでよかった。ボーイズが、上の荷台にさっとトランクを収めてくれた。



《新幹線の2等車》

ここは2等の指定席である。座席は向きが変えられるわけではなく、中央にだけ、テーブルを挟んでの向かい合わせ席があった。そちらの席になったひろ子さんと洋子さんは、インド人女性に真っ向から座られて、それで長時間は居心地が悪そうだった。

「あ、今日の夕日だ」の頃に、スナックのプレートが運ばれてきた。久しぶりに夕日まで見た、長くて暑い一日（まだ、終わっていないが）。

最初はネパールと同じと感じた。しかし、あちらは北海道2つ分の面積に、標高150mから8,000mまでが連なり、傾いて密集しているような国。背景にヒマラヤの高峰が拝めて、ギョロ目のチベット寺院や五体投地も共存する。こちらは広大で、地平線から朝日が上り、夕日が沈む、空も広い国…。

暗くなったあたりで、今度は夕食プレートが運ばれてきた。3品が全てカレーで、さすがに、手が出なくなってきた。



《カレー三味の夕食》

ところで、アグラ駅で降りるのだが、しおりには、西のデリーまで7時間電車で行き、バスで東のアグラへ5時間かけて戻る…になっていた。行きのように飛行機で飛ぶならともかく、アグラ駅があるのに通過？かつ、また延々戻ってくるのも、おかしい話だった。

ニラジさんが、アグラ駅で電車を降りて、バスには空身でベナレスまで来てもらい、アグラ駅で合流…に手配し直したらしい。

私もついでに「OPだって、おかしかったですよね。何も説明聞いていませんよね？」と言ったらみんなが「何それ？」と言う。

「ほら、『ツアーインフォメーション』のここに、4日目タージマハルショーがあって、現地申込んであるでしょ？時間とれるはずがないのに？と思ってたんです」



思い込んでしまい、念押しが抜ける…。便利な分、扱い量が増えて、個別チェックに手がまわらなくなった…似たようなことがいっぱい起きてくるとは思っている。

ともあれ、アグラ駅で降りる用意。またもトランク下ろしにボーイズが頑張ってくれた。

タク君が「節子さんの、変わった生地ですね」とオパール加工生地の袖を触る。ひろ子さんの「痴漢に思われたりして」に、「ハハ、何年ぶりかしら？」と返したら、すっと引かれモードに…。あ、あ、またワングル教養を出してしまった…と反省。

同様に、出口に詰めてきたインド人一家が、私達に興味深そうにしている。弟が「ドラえもん」と言っている。タク君が日本のアニメのタイトルを次々言って、わからなそうだと、スマホで映像を見せている。兄弟は、ワンピースも鬼滅の刃も知っていた。やっぱり、日本＝アニメなのだ。父親がニコニコとボーイズと一緒に写真を撮る。下車したら、今度は兄ちゃんの方が追いかけてきて、写真を撮り、やったあとばかりに引き返していった。ニラジさんの言ったとおりだった。

二日ぶりのバスに乗り込んだのは、22時40分。暑季だからか、町はまだまだ人出が多かった。

遅くはなったが、「タージ・マハルにはすこしでも涼しいうちに…。でも、明日はもう飛行機に乗りますから、今晚のうちに搭乗の準備もしてください」

で…明朝は7時45分に出発となる。

で…明朝は7時45分に出発となる。

他のみんなは、ネット申込で、ネット配信をダウンロードしていたらしい。「そんなのなかったよね。このしおりにもないもん」と言う。さらによくよく見たら、「おひとり様 30～40 ドルまたは 30～40 ドル相当のインドルピー〈2024年12月4日現在〉」と印字されていて、どうやら郵送扱いの書類にだけ、古いイベントが削除されずに載ったままになっているようなのだった！

そういえばアメリカの時も、冬季だけの変更があって、三人ともが、違う説明を受け、わけがわからない！になったことがあった。

電話相手のオペレーターは、ディスプレイに出てきた通りを説明するだけで、この手のおかしい！には気づかないものだ。

今回のような現地ガイド任せのプランは、日本とインドは方の守備範囲が曖昧になり、詰めが甘くなっているようだ。本命責任者みたいのがない。だから、どこかで手抜きになって、整合しないことがおきてくるのだろう。ネットが便利か？といえ、根本ミスを直す機能はないのだし、現実的には、徐々に慎重さが欠けていくのだ。ネット経由なら正しいとバイアスで



《ホテル室内》

高級ホテルのグランド・メルキュールへは真夜中に着いた。高級だからか、ニラジさんは別宿なのだ。私はすぐトイレにすっ飛んで行ったから、なおのこと、他の説明を聞かなかった。

部屋は一挙にモダンな佇まいになり、ミネラルウォーターまで、スッキリデザイン。

でも、もう帰国なんだ！



《朝食》

◇5月17日（日） アグラ～デリー

高級ホテルだというのは、オムレツをオーダーできることからわかった。インドの、黄身の色の薄い卵も、これが最後。カレー類はやめて、菓子パンとヨーグルト、フルーツだけにした。

このホテルのフロントのガラスケースには推奨土産品が陳列しており、これが、私達買ったものばかり…を確認する。今回については、最後に大型スーパーに寄って…の場面がない。それに代わるのがバスの中での紅茶販売となり、ルピーの始末もやれるのだった。

タージ・マハルはすぐ近く。ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンの子供ムムターズ・マハルの墓だ。彼女は19年の間に14人の子供を生み、1631年に39歳で死去。その際、世界一美しい墓を建てること、再婚しないことの二つを夫に誓わせたという。22年の歳月と莫大な費用で廟は完成したが、その対岸に自身の廟を建てようとした皇帝は、息子に幽閉され死去する。そして、愛妃の隣に葬られた。

今年の年賀状の2枚にタージ・マハルがあったから、もしかしたら、なんとなく影響されていたのかも

しれない。どんな立地かな？くらいが頭の片隅にあったのかも…。

阪急のチラシには「世界遺産ランキングでもいつも上位に入る、22年の歳月と一日2万人の労働力をかけて造営した総大理石の霊廟。緻密な左右対称の設計と、宝石が埋め込まれた壁面が美しく、インド・イスラーム文化の傑作です」とある。

まずほとんどをバスにおいていく。そして、カートに乗る。その間には露店が並び、土産物売りも多い。



《カートに乗る》

それから身体チェックと、手荷物チェック。強引にばたばたと預けさせられるわりには、それを当人に戻すときの確認は、超いい加減。簡単に盗難がおきそうだった。厳選した超貴重品ばかりだったから、ハラハラしてしまった。長い通路を抜け、そこを右折でいよいよタージ・マハルへの赤砂岩の正門になる。



《メインゲート》

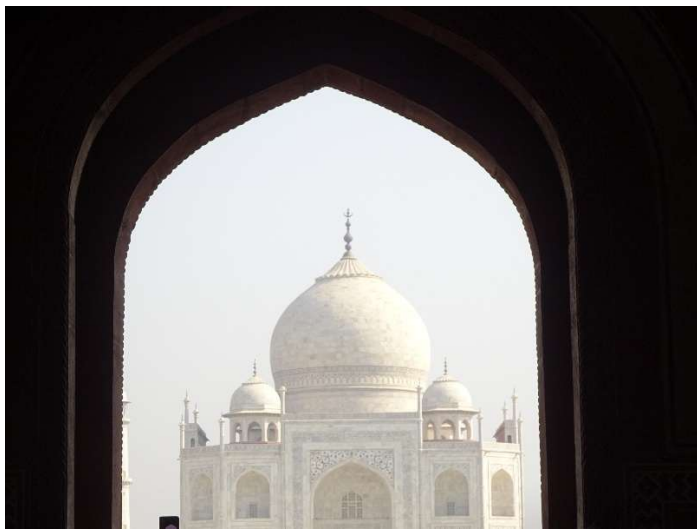
そこには、撮影請負人がたむろしていた。デジカメもスマホも持ち込めるが、圧倒的なタージ・マハルを背景に、悠々ポーズをしたければ、やはりプロがいい。5ポーズを選んで500ルピーならと、申し込む人が多かった。その分、ガイドさんに撮影を頼む人は減るのだから、私は自前カメラでよしとする。

門の出口を額縁に、中にタージ・マハルを嵌めこむのが、第一の写真スポット。しかし、外はあまりにまぶしく相手は白い。デジカメの方が調整できずあたふたしている。ヤムナー河を背景の広い空に、これまた広々の敷地と、庭園と泉。人工物でこれほど美しいというのも、そして愛妃のためというのも、桁外れ。私は愛されるゆえに、おなかに常に子宝がいるのもどんなものやら？指10本に宝石が輝いていればそれが至上の満足になるか？を思い、今、見に来ていている自分が、自由で幸せと確信する。



《インド・イスラーム文化の傑作》

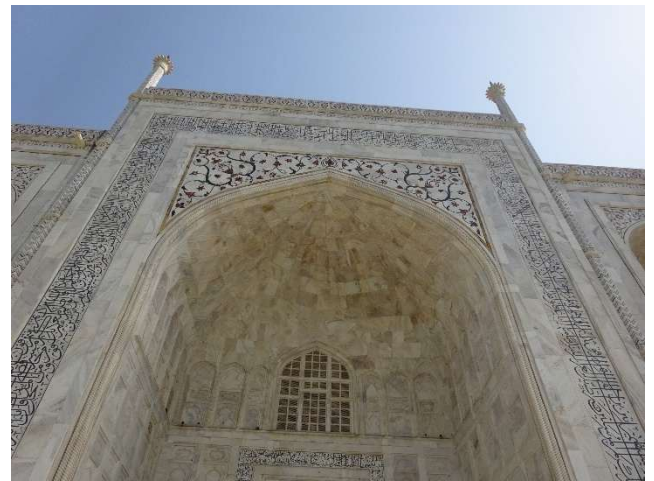
タージ・マハルの完成後、シャー・ジャハーンは重病に陥り、4人の息子が帝位争いを始め、第3王子が帝位につく。彼は父を、この後に行くアグラ城に幽閉し、彼は8年後に憤死し、翌日、妃の隣に葬られたとある。そういう話をまとめて、さらに白く輝いているのがタージ・マハル。撮影自由だから（墓のある廟内のみが禁止）誰もがポーズを取り、水面に映りこんだタージ・マハル、天頂部を掴んでみたタージ・マハルと、様々なアングルで楽しんでいる。



《門からのタージ・マハル》

アラへの信仰のためにではなく、美しさを追求した廟は、メインドームのカーブが美しく、ピエトラ・デュラという宝石による象嵌細工は、荘厳かつ繊細。花のレリーフも、凄い。同じ物を作らせないように、完成後、職人の手を切った…の話も残り、権力者の美とは？傲慢で病的！にもなる。

43mのミナレットは、地震の際に廟の側に倒れないよう、外傾して建つ。かつて、見合い結婚の風習に悲観した女性の身投げが続き、登楼観覧はできなくなったという。



《豪華な入口》

ビニルのカバーを靴にかぶせ、廟の内部へ。日本の寄せ木細工も凄いのだが、こちらの石にほどこした透かし彫りも凄い。かつ宝石で、さらに象嵌しているのだ。その象嵌が削られることもあったので、遮蔽の柵がある。妃の棺は中央に、後で添えられた王の大きい方が横にある。それらの本物は実際には地下にあるという。裏側に出ると、ヤムナー河からの風が通る。皇

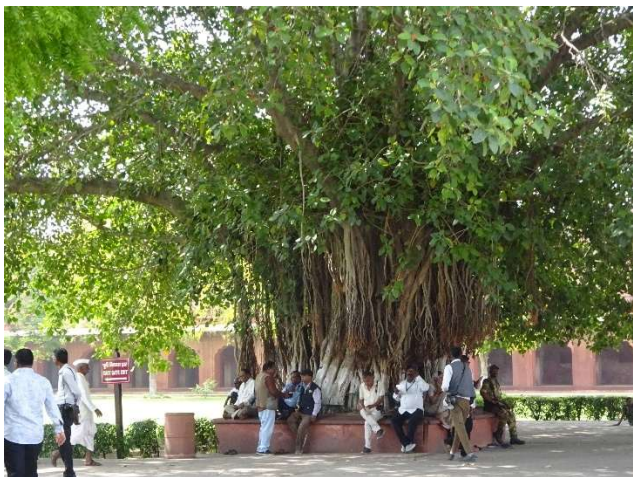
帝は、向かい側に今度は自分の廟を建築しようとし、息子に退位させられた。玄宗も楊貴妃で滅びるのだが、歯止めのきかない尺度になるのが王宮育ち…暴走するのが前頭前野だ。

暑季は、観光にはシーズンオフだからか、インバウンドを見ず、インド人ばかり。様々なサリーをまとい、鷹揚に歩いている。全年齢層がいる感じ。



《インド人客が多い》

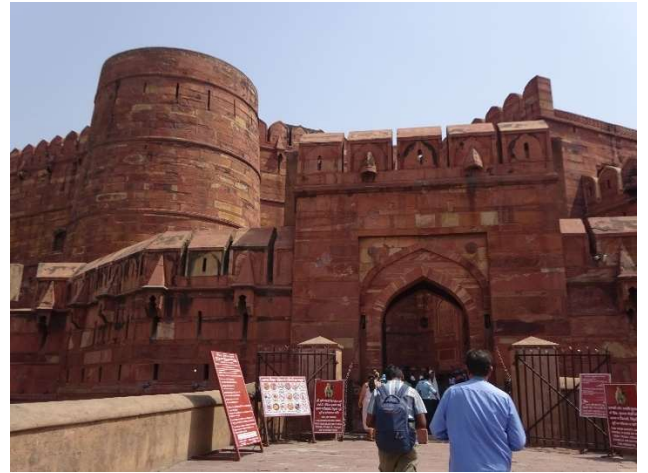
上には火焰木、下にはジャスミンやハイビスカスの生垣、中庭を回り、正面門を抜けると、大きなガジュマルの樹の下で涼んでいる人達もいる。ひたすら暑い。いちいち気温の数字を聞いてはいないが、ニラジさんは「明日は48度に行くでしょう」と言っていた。



《ガジュマルの木の下で涼む人達》

カートから降りると、土産売りに囲まれた。私も、このあたりで恒例マグネットを買ってしまうことにした。タージ・マハルを10枚と、水晶のタージ・マハルの置物を合わせて\$20だったのを、\$10に下げた

ところで買った。洋子さんのガンガーのマグネットと、何枚かを交換することにした。



《アーグラ城》

次がアーグラ城。インド・ムガル帝国の16~17世紀に築かれた、赤砂岩の壮大な世界遺産。第3代皇帝が築き、以後300年にわたって歴代皇帝が住居としてきた。高さ約20mの堅固な二重の城壁が約2.5kmにわたって続くため、「レッド・フォート」ともよばれる…とある。あのシャー・ジャハーンが白い大理石を使って大増築をし、宮殿になった。「宝石のモスク」など、燭台を置くための窪みがあって、その周りも装飾されている。それが煤けているのは、装飾の金を溶かして集めるためにイギリスが燃やしたから…。ここにも美しさより、金そのものに価値ありとした強欲がいたのだ。贅を尽くす権力者もいれば、溶かしてナンボと無にする雑兵もいる…欲で美は生まれ、欲で消えて、海を渡っていく…なんか、やってられない気分になる…。



《豪華の装飾の一部》

大理石の八角の塔はムサンマン・ブルジュ（囚われの塔）で、シャー・ジャハーンが幽閉され、8年間タージ・マハルを眺めていた場所とされる。そのような話のタネになっている。



《幽閉された塔からのタージ・マハル》

堀をまたぐ跳ね橋や、熱いオイルが流される防衛のための仕組みは、日本の城と同じ。どこであれ、絶えず戦っているのが、ヒトの歴史なのだ。

今さら、トランプのプーチンの、エタニヤフのと…歴史を繰り返しているだけなのだ。特にイスラエルは、ホロコーストがひどい話と思っていたが、強硬な無差別爆撃を見たら、ヒトは崇高になることはなく、永遠に報復を続けるものだと思うようになった。歯止めがきかない…がどこまで行くのやら…。



《世界遺産登録の石碑》

いよいよ最後のランチだ。「カレーは一生分食った！」ので、「中華でも」の案になった。「でも、もし

カレーチャーハンだったら？カレー餃子だったら？」と、仲良しメンバーは笑い合う。

幸いに、ニラジさん推奨は、普通に中華だった。山口氏が、中国語を使いこなしていた。

空港までの車内で、いよいよお土産セールだ。基本、値段での割引というのではなく、5個買えば1個おまけになるというシステムという。上質なお茶は高そう。でも紅茶が、茶色の水にしか見えない私は、安いマサラティーのパックで、ルピアを始末できれば十分だった。前の座席だった山口氏は家族が紅茶好きだそうで、カードでかなりの額を買っていた。



《高層アパート群》

高層アパート群がかなたに見えた。今回は、大発展中のインドという部分は見えていない。元々が、こだわったあげくの行き先ではなく、全てが、思いがけない旅だったのだ。ニラジガイドも、出ず入らずの、ちょうどいいガイドという印象だった。何より7人というのが、旅らしい旅になり、メンバーには恵まれた。さあ、日本へ。



《インディラガンディー国際空港》

◇エピローグ

朝 8 時に羽田に着き、ターンテーブルでみなさんと別れた。午後に着いた金沢の方が、よほど外人だらけだ。ひがし茶屋街へのバスに乗ると、ましてや観光客だらけになる。知らずして、異国の敷居が下がっているのかもしれない。

留守中の郵便物に、阪急の玉龍雪山残金振り込みの請求書を見つけ、さっそく振り込みに行く、まず 10 日後には礼文島フラワーハイキングがあるから、せっせと紀行書きにとりかかろう。

23 日、3 月 1 日に受験した、加賀友禅検定の合格者祝賀パーティーがあった。顔なじみになった加賀友禅大使の代表が、「舟田さん、最高得点賞ですよ」と囁いていった。やはり嬉しい。加賀友禅を着るか迷ったが、5 月下旬の 2 週間がベストとされる（ゆえに、贅沢品の内）、母の紗合わせを着た。



《 2 回に分けての記念撮影 》

講演のゲストは着物ブロガーの朝香沙都子さん。かつての木村孝さんとか、伝統の着物文化を知る人は消えていき、着物世界も、WEB の発信者が中心になりつつある。彼女は、クレール射撃と通院以外は全て着物で、それも日に何度も着替えるのだという。みみっちい節子は誰が手入れをしてくれ、どこから購入資金が？を思うが孫氏が仲人だったというなら、それなりのバックを持つ方なのだろう。

加賀友禅大使も、今日はパーティーならなおのことだが、派手目な柄になっている。頭もセットし、髪飾りもつけて、華やかに…パーティーだから、それでいいのだ。昔のような TPO 警察がいるわけではない。

会場の華になって楽しむ…は判りやすい「今を楽しむ！」だ。

ちなみに、本日の参加者の半数は、県外在住者だという。WEB で加賀友禅産地ならではのイベントとして、全国発信をしているようだ。産地の維持には、日本、世界を市場に！の意気込みも大事だ。

加賀友禅普及のために、若手作家が、この検定などを含め、協力して動いているのはいいと思う。しかし私の実践のような、親のでも着られるという着物の伝承メリットは…。次々と新作を買ってもらわねば仕事には繋がらず、需要アップにはならない。

だからといって、富裕層向けの高額展開になっていくのは、ちょっといただけない…。

いや、手描きという手わざは、もっと評価を得てもいいのかもしれない。使い捨てをやめ、人の手からなる絶品を、大切に使う…が、人を大事にすることで、地球を大事にすることに繋がるのだから。

女性に家事は大変（すでに偏見？）だが、どんどん楽にもなっている。爪にネイルをてんこ盛りする時間があるのなら、着付けや手入れする時間くらいは、本来はあるのだろう。化粧に 2 時間かけるくらいなら、あるいはアニメの主人公になるコスプレに燃えられるのなら、着付けくらいは定番仕様でむしろ簡単だ。

自分が素敵に見えて、美術品をまとえて、着物と帯の限りないコンビネーションが展開できる…となれば、着物変身はコスパがいい！の判定に、いくらでも変わりうる。

一方「筆筒の肥やしを活用する」は、私には気になる分野である。金沢で「着物を着る日」を作り、街の景色を変えよう！プロジェクトがあってもいい。底辺が広がってこそ、頂点としての華やかな加賀友禅も生きる。

着物で変身を楽しめる社会は、ドンパチやって消耗している社会よりはずっと平和で、幸せで、心安らぐ。「成人式の振袖は贅沢！」と排斥した時代も過ぎた。その発想はむしろ戦時下の贅沢禁止に近かったかもしれない。レンタルや使いまわしの手もある。伝統衣装で着飾り、通過儀礼として皆が成長を祝う日があっ

てもいい。着たいなああの思いが通り、それに微笑む世の中の方が、望ましい。その方が桃源郷に近い。

などを妄想している間に、書道家のパフォーマンスが終わった。続いて、作家紹介やベストドレッサー賞や、成績優秀者発表（壇上で、商品を受け取り、記念撮影）があって、最後に、作家たちが持ち寄った小作品がもらえる抽選会へ。何と最後の特賞の染め額に当たってしまった。今年の運を使ってしまったかも…。「はばたく」のテーマの抽象柄が、今の自分にはぴったりと思えた。

夫が随分と素直に、「最高得点？すごいよ！」と誉めてくれた。ひとまず、課題に真面目に向き合ったのは確か。今日まで、そんな「くそ真面目」は維持してきた…。

紀行の息抜きに、昔の木村孝子さんの着物マナーの本を読み返してみても、改めて世の中が変わってしまった…も思った。長幼の序が消えた今、「年上の方に聞いてみる」や、「若い方が、恥をかかないよう、教えてあげる」のアドバイスは昔話の類になった。社会人に必須のTPOの「常識」もなくなった。黒留袖の出番はなく、喪主も黒紋付を着ない。

万能の色無地の章で、「グレーは喪の色です」と木村さんは断言している。しかし、着物スタイリストの森田空美さんは、グレーをマイカラーとして、都会型着付けで一世を風靡している。

着物に限らず、NHK アナウンサーの服装すらがカジュアルになった。高市総理の映像に、スーツというファッションがあるのを思い出すほどだ。

文化はよりビジュアルに傾き、DX の流れに乗る、乗らない…がある。ちなみに、加賀友禅界隈での若手の雄・志々目哲也氏は、富永愛とのコラボ、欧米オートクチュール工房とのコラボを展開し、3年先まで注文が入っているという。こんな時代と嘆く人もいれば、時代の寵児になっていく人もいる。

そうそう。あの朝香さんは、昨日金沢入りしてから、着物にスニーカーで観光していたという。会場に入ったら、草履に履き替えるそうだ。

昔に比べれば着物警察（着物姿に冷やかなチェックをいれる人）はいなくなった。着物が生き残っていくためには、もう一段、どんな場面でも着物で通せるといふ、自由で、気楽にまで、いかねばならないかもしれない。

ちなみに、出番のなくなった黒留袖に光をあてるべく、「黒留袖を着る会をやるか？」を2度聞いた。ある意味、仕掛け次第なのだ。過去から解を引き出すAIではなく、どんな未来を創るか？人でなければできない発想へ、行けた者勝ちなのだ。

どちらにせよ、ヒマになった分、着物を着ねば…は、自身の課題である。

これから暑い～が難…だけど。



《志々目哲也氏を囲んで》

ここへきて、「(賃金をもらうべく)働くか？」の煩惱は、どこかへ行ってしまった。まさに、ガンガーの沐浴効果だ。

体がしゃんしゃん動くのは、5年の介護パート仕事のお陰であろう。介護界隈の本音と建て前の知見も備えた。現場をしかと体験できたのは大きい。今後の加齢に、冷静に対処できることだろう。

しばらくは、自分を優先しての、楽しめる時間を過ごそう！

—完—